植える森から育てる森へ

第1回帯広の森市民育樹祭

下枝払いや間伐

植える森から育てる森への転換点となる第一回帯広の森市民育樹祭が、二十日午前十時から帯広市南七線五十四の昭和五十一年の植樹地で行われた。市民五百人が参加し、生長した森の木々の現状に認識を深めるとともに、下枝払いや著しく生長の遅れている木の除伐に汗を流した。

下枝払いに精を出す育樹祭参加者

500人が汗流す

都市と農村を結ぶ壮大な緑の空間形成を目的に、帯広の森は五十年、第一回の市民植樹祭で造成がスタートした。これまで十七回の植樹祭で、七十九ヘクタールに三十八万七千九百三十の苗木が植えられている。

十七年たって苗木だった木も十メートル余りに生長、当初の衝植えのため一部で生長障害を起こしている。また百年事業の森づくりには今後、育てる作業が大きなウエートを持ってくるとし、今年から間伐をスタートさせるとともに市と植樹祭実行委員会が呼びかけて育樹祭を企画した。

小・中学生のグループや営林署OB、森仕団体など二十一グループと個人合わせて五百人が参加。菅原靖夫助役のあいさつ、帯広営林支局の成澤英美子森林インストラクターの育樹指導、作業上の注意を聞いたあと作業に入った。

参加者たちは木の生長と混雑状況に驚きながらノコギリを片手に地上から三メートルまでの下枝を払うとともに、抑圧されて生長が遅れている木を間伐。また子供たちはシラカバの間伐材にナメコやヒラタケの種を埋め込む菌打ちを楽しんだ。ちょうど一年後には実ったの育樹祭でキノコ汁を楽しむ。

三千四百五十三本の木が植えられている。

十七年たって苗木だった木も十メートル余りに生長、当初の衝植えのため一部で生長障害を起こしている。また百年事業の森づくりには今後、育てる作業が大きなウエートを持ってくるとし、今年から間伐をスタートさせるとともに市と植樹祭実行委員会が呼びかけて育樹祭を企画した。

小・中学生のグループや営林署OB、森仕団体など二十一グループと個人合わせて五百人が参加。菅原靖夫助役のあいさつ、帯広営林支局の成澤英美子森林インストラクターの育樹指導、作業上の注意を聞いたあと作業に入った。

参加者たちは木の生長と混雑状況に驚きながらノコギリを片手に地上から三メートルまでの下枝を払うとともに、抑圧されて生長が遅れている木を間伐。また子供たちはシラカバの間伐材にナメコやヒラタケの種を埋め込む菌打ちを楽しんだ。ちょうど一年後には実ったの育樹祭でキノコ汁を楽しむ。

十勝毎日新聞
平成3年10月20日

十勝毎日新聞
平成３年10月21日

僕らは"森の床屋さん"

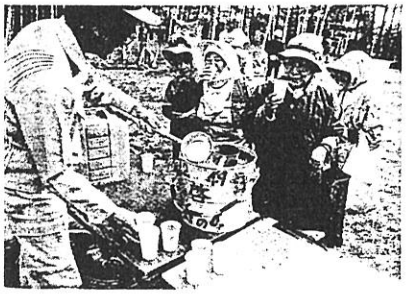
切れないワ 「なかなか切れない」ノコギリを使うのは初めての子も

注意を聞く ノコギリ使用の注意を真剣に聞く子供たち

帯広の森育樹祭スナップ

植える森から育てる森へのスタートを切った帯広の森。第一回市民育樹祭には「大きく育て市民の森に」と願いを込め、市民約五百人が参加して下枝払いや抜き取り間伐に汗を流した。人が入れないまでに下枝がはびこっていた森も、「市民の床屋さん」のおかげで、わずか一時間ほどで見違えるほどに。初の育樹祭の表情をスナップした。

ごみ拾いも 作業が終わったあとはみんなで森のごみ拾い



水おいしい 働いたあとは水が最高

駒菌打ち 「来年のキノコ汁が楽しみ」とナメコの駒菌打ち

十勝毎日新聞
平成３年12月６日

森と自然と十勝と

C・W・ニコル氏・林編集局長対談

上

十勝毎日新聞社の年間キャンペーン「5万分の1の地球―十勝の環境を考える」とエゾリスの会創立五周年記念の合同企画・グリーントーク「森との語らい」（五日・帯広市民文化ホール）の講師として初めて来帯した作家のC・W・ニコルさんは、六日午前、帯広市内の北海館ホテルで林光繁十勝毎日新聞編集局長（副社長）と対談した。ニコルさんは、北海道の森の印象や超自然の世界、アイヌ文化の奥深さなどを、エチオピアやカナダ北極圏での経験を織り交ぜながら熱っぽく語った。キャンペーンの第五部として、対談の模様を三回に分けてお伝えする。

年間キャンペーン第５部

林　ニコルさんは日本のどういうところに引かれたんですか。きっかけは武道だったのかな、と思うんですが。

ニコル　きっかけは武道。引かれたのは日本人と自然です。日本人は一度友達になると非常に忠実で正直ですよね。言葉になっていない言葉さえ分かれば。

林　なるほど。今、日米摩擦などといわれてます。これは日本があまり主張しないというか、良にあることを言わないからでしょうかね。

ニコル　間違った人間同士で話しているからですよ。政治家は正直者でないですよ。新聞記者、作家、農民同士で話し合い、政治家に指示すればいい。今は逆ですよ。

林　日本の自然はどういうところがいいのですか。

自然が荒らされている北海道

ニコル　原生林がヨーロッパと比べていっぱい残っていること。でも、これは本州ですね。北海道に初めて来たのは十一年前です。非常にあこがれていました。しかし、千歳から札幌に向かっている間、そしてあとで空を飛んだ時、深くショックを受けました。こんなに自然が荒らされた国は、ほかではエチオピアくらいなものですよ。あとで知床など入って北海道のルの白神を見て、ああいいなあ、と思いましたが、川と木がないですよ。

林　農業をするために、生活するために木を切ったんですけどねえ。

ニコル　そのやり方が下手だったんです。例えばヘッジ（垣根）があるでしょう。これはポプラだけではだめなんです。鳥が巣を作るような木とかいろんなものがないとだめです。それは畑にもいい影響を与えます。さらに水もきれいになる。人間も住みやすくなり、人も集まります。アイヌの人々のアドバイスを聞いてほしかった。北海道が好きだけどそれはショックでした。

林　ブナ、ナラ、カシワを残しながらすべきだったのですね。

木は自然のクーラー

ニコル　オーストラリアで牛をいっぱい死なせたことがありましたよね。大きな木があれば、黒い牛でも生きられたと思います。木は木陰を作るだけでなく、葉の一枚一枚がクーラーです。家畜には木があった方がいいです。自然の可能性を見て農業をやってほしかった。これから森（帯広の森）をつくることは、北海道にとって大きな大きなステップになるでしょう。

林　十勝や北海道で木を切りはじめて百何十年かになりますが、これからわれわれもう一度、畑のへりや川べりに木を植え、森をつくる作業をすべきということですね。生産性も上がってくるでしょう。

ニコル　私は絶対上がると思います。大きな実験をやらなくちゃいけない。僕の友達がこの間こう言いました。「山の奥に入って道に迷っても慌てることはない。知ってる道まで戻ってゆっくり考えればいい」。

林　そうすると、北海道の場合開拓前まで戻れば良いということですね。

ニコル　近代的なノウハウと昔のノウハウが一致したら良い。限られた面積でも莫大な可能性があります。無駄はよくない。

林　土地を効率的に使えば、もっと森のために土地を残せますね。私たちの地域の開発、発展の核心に触れるようなお話をうかがいました。

（敬称略・つづく）

開拓前に戻る大きな実験を

むとう写真館
☎0155 5 0377-0-14

北海道の森の姿などについて語り合うC・W・ニコルさん（左）と林光繁編集局長

十勝毎日新聞
平成３年12月７日

森への愛情 語りかける

グリーントーク「森との語らい」

「本当の共存」「緑の革命」を ニコル氏ら提言

環境問題をテーマに開かれたグリーントーク「森との語らい」。３人のパネリストは緑に対するそれぞれの思いを自由に語り合った（左から高橋延清氏、廖巻裕蔵氏＝司会＝、C・W・ニコル氏、竹田津実氏）

自然とともに生き、自然を創生する―。グリーントーク「森との語らい」（主催・十勝毎日新聞社、エゾリスの会）が５日午後１時半から帯広市民文化ホールで開かれ、作家のC・W・ニコル氏らが講和、森づくりや環境教育、自然との接し方について多彩な示唆、提言を示した。

5万分の1の地球
十勝の環境を考える

詰めかけた550人の聴衆。ニコルさんらの温かみのあるトークに熱心に耳を傾けた

エゾリスの会（会長・廖巻裕蔵帯広畜産大学教授）の創立五周年と、十勝毎日新聞社の年間キャンペーン「5万分の1の地球―十勝の環境を考える」の記念イベントとして企画。幕末フィルム・グリーン基金の助成を受けて開催した。

ステージに樹木を植えて森を創出した会場には昼目の午後にもかかわらず学生や社会人ら五百五十人余りが詰めかけた。

はじめにニコル氏が「マイ・ワイルド・ライフ」をテーマに民謡講和。病弱だった少年時代に人間関係で悩んでいた心を森に癒（いや）された経験、日本の豊かな原生林との出合い、生業れ故郷の英国ウェールズ地方の森の再生など多彩なエピソードを紹介しながら「緑が戻った人間が戻る」など、森への愛情を込めて語りかけた。

続いて元東大農学部長野副智林長、高橋延清氏が「森の世界」と題して講和。「森の中は、自然が描いたデザインに満ちたステージを作っている」と指摘してミズナラやザゼンソウ、オシドリなど森に生息する生命の輝きを朗読して紹介、自作の詩を朗読して「緑の革命」の実現を訴えた。

さらに、動物写真家、竹田津実氏が小清水町で実践してきたナショナルトラストについて事例発表を行い、「ホーツクの村」と名付けた人工林を「森に生きる生命の輝きを語り、森の保全運動の経過を説明し「森をつくる取り組みは自分が死んだ後に実現する。エネルギーを持続させるのが難しく、帯に理想の具現化と楽しみを残す運動と同時につくっていく運動もあるべき」と提言した。

カムイトウウポポ保存会の安東ウメ子さんがアイヌの伝統楽器ムックリの演奏を披露したあと、廖巻会長の司会で討論を行った。

このなかで、帯広の森の柔い（ニコル氏）と提言した。

なお、この模様はOCTVが八月午後三時、十三日午後八時、十五日午後二時からch で放送する。

ステージに森出現

○…ステージに森が出現し、森との語らいがタイトルのこのトークのステージに森が出現した。帯広の森で間伐されたドマツを会場に運び込み、小さな森を出現。テーブル、いすも木製で観客を森の中へ誘い込んだ。

堀之内清志エゾリスの会副会長は「会員に造園関係の仕事をしている人がとてうまくステージを彩ってくれた。多くの人に聞いていただけ、思い切ってクリートークをやって良かった。この成功を生かして進らすべきことと、木長」に木を植えていたい」と話していた。

自然の見方変わった

○…「ニコルさんやどろ爪先生の話を生で聞けて感激です」と二コリするのは帯広市西二丁五南一、主婦、横山ゆきまさ子さんと同市西十六南一、主婦、西田芳恵子さん。

横山さんは帯広の森の近く、西田さんは西町公園の近くに住んでいるが、「あまり身近に自然があった」と感激する機会がなかった」そうだが、「自然の見方が変わりました。もっと身近な自然と対話したい」と満足していた。

札幌からも来場

○…貴内を中心に多くの人が駆けつけたグリーン・トークだったが、札幌市北区の野生生物情報センターの小川森代表委員も遠方から会場に来た一人。「札幌でもこれだけのメンバーを集めての講和会は珍しい」と主催者をたたえた。

特に平日の午後という時間帯で五百五十人が会場を埋め尽くしたのには驚いた様子で「札幌でも一人がやって、それが十勝でこれだけの人数を集めるとは。自然との共存という考え方が浸透しているようだ」と感心していた。

都市間バス
旭川へ。
拓殖バス
31-8811

十勝毎日新聞
平成3年12月8日

森と自然と十勝と

C・W・ニコル氏・林編集局長対談

「中」

5万分の1の地球
十勝の環境を考える

年間キャンペーン第5部

人間を超える〝超自然〟

林　エチオピアの悲惨な状況がなぜ起こったのかを、公園の管理者として、帝室を通しての経験からも詳しくお話しいただけませんか。

木の伐採でエチオピア飢きん

ニコル　エチオピアは戦争（第二次世界大戦）が終わったころ、アフリカのパン籠（かご）といわれていました。アビシスアベバの周りや北部には豊かな畑が広がっていました。ところが、イタリアが追い出され、近代的農業をつくらなければならなくなって、お金が必要になりました。外貨を稼げるのはコーヒーと動物の毛皮だけでした。

政府は農民から税金を取ろうとしました。北部はあまりコーヒーができないから、農民は山の斜面でもできる大麦を作ろうとしました。斜面の木を伐採し、焼畑にし、段々畑にもしないで大麦を作りました。雨期になると表土が流されて、三、四年で山が禿になりました。いろいろ複雑ですが、戦争が大きな原因の一つであることは間違いありません。

C・W・ニコル氏

林　木を切って表土が流れ、農耕もできなくなり、エチオピアの飢きんの原因になったのですね。森をなくすと農業もできなくなり、住民も飢餓に苦しむ。示唆に富む話ですね。その森の良さとは端的にいうとどういうことになりますか。

ニコル　僕の森は、四万五千坪（十四・八ヘクタール）しかありませんが、四十年の一年分の枝、食べ切れないキノコ、樹液、山菜、レクリエーション、目に見えない力を提供してくれます。もう一つは、信用です。日本人が僕を信用するようになりました。これはお金で買えません。

林光繁編集局長

林　調和で超自然という言葉が出てきましたね。聞き慣れない言葉ですが、どういう自然ですか。

ニコル　僕は去年から十三年ぶりに北極に戻り始めました。

林　それは人間の力を超えるもの、周りの自然を超える何かがあったということでしょうか。

ニコル　今年は、山が見ている、と思いました。山に頂が見えるんです。それが人間の形になりました。そのうちにほかの生き物が見えるようになるでしょう。そうすると僕はイヌイットの素（もと）、アボリジニの素になるんです。有名な詩人たちもいらっていない何かをいただけたように思います。

林　宗教的であり、哲学的なものでもあり、まさに超自然ということなのでしょうか。それが、人間が持っている何かに働きかけて来るのでしょうね。科学の対比に宗教があるということを実感させられたようにも思います。

（敬称略・つづく）

動物の反応で知る自分の存在

ニコル　彗星の生き物にも砂とか力とか勇気とか、すごいものがあるでしょう。エゾリスが厳しい自然の中でちゃんと生きているじゃないですか。すっと環境にされてもちょっと可能性があれば、増えてきたでしょう。人間はそんなことはできない。でも本当はできるんです。去年、カヤックの旅から帰ったら、まだだれにも言っていませんが、イヌイットの新しい名前をいただきました。そして「お前が無邪気だったのは、動物と鳥がずっと見ていたからだ」と言われました。

僕も今年すごくそれを感じたんですけど、大自然にいると鏡もなければまかの人間もいない。自分の古いアイデンティティーがポロのように抜けちゃうんです。肩書がなくなり自分がいなくなっちゃうんです。自分の存在は動物のリアクションで知るんです。危険や動物が心配していることも分かります。アザラシなどもそーっと寄って来るようになりました。

北極一人旅で自信と力

林　自然と融合したのですね。

ニコル　今年は、山が見ている、とも思いました。山に頂が見えるんです。それが人間の形になりました。そのうちにほかの生き物が見えるようになるでしょう。そうすると僕はイヌイットの素（もと）、アボリジニの素になるんです。有名な詩人たちもいらっていない何かをいただけたように思います。

林　宗教的であり、哲学的なものでもあり、まさに超自然ということなのでしょうか。それが、人間が持っている何かに働きかけて来るのでしょうね。科学の対比に宗教があるということを実感させられたようにも思います。

（敬称略・つづく）

十勝毎日新聞
平成3年12月9日

森と自然と十勝と

C・W・ニコル氏・林編集局長対談

「下」

5万分の1の地球
十勝の環境を考える

年間キャンペーン第5部

奥深く美しいアイヌ文化

林　十勝にはヒグマを怖がっている人が多くいます。北海道のヒグマは非常にどう猛で、十勝の開拓は、ヒグマとの闘いの一面があった。「クマは殺さなきゃならない」という感覚できたんですね。ヒグマは減ってきているし、あまり怖い存在ではないんだけれど、森にはクマがいるから入れない、殺せという感覚が残ってます。これを払しょくしなければ十勝の人は森に入って行けないんですが。

クマを犯罪者にした人間

ニコル　アイヌの方々はクマと大昔から付き合ってますでしょ。アイヌの方々にはクマとの事故はなかったと思います。クマによるんですよ。悪いクマもいるし犯罪者（のクマ）もいます。でも大体は、人間が犯罪者にするんですよ。けがをさせたり、子グマと母グマの間に入ったり、クマが埋めたシカを掘り返したりして、襲れさせるんです。カナダではそうでした。謙虚に付き合ったらいいと思う。

日本政府と議論するんですが、絶滅させるつもりなら、そう言えといいたいんです。裏では絶滅させたがっているんですから。そうなければ有害駆除ということで穴の母子を殺すようなことはしないでしょう。どこが有害なんですか。でも、家族とか僕の馬とか僕に感謝をしたら殺すでしょう。ケースバイケースです。

獣医の竹田津（実）先生から聞いたんですが、取られたヒグマを解剖すると何十発も弾を撃たれて当たって死ぬのは一発だけだというんです。これは駄目です。弾と戦争は違うんですから。戦争は相手も鉄砲を持ってますから撃たせないために何十発も撃つことがあるでしょうが、弾はスナイパー（狙撃手）です。

林　昨日、安東ウメ子さんのムックリをお聴きになったと思いますが、あの音色からは何を感じられましたか。

素晴らしい「ムックリ」

ニコル　前からインディアンなどそのたいのものは聴いていますが、ムックリは初めてでした。いやあ、ものすごくソフィスティケート（洗練）されたものでした。素晴らしい。聴いていて僕も血を吞きたくなったんです。メロディーとリズムが複雑だったけど、自分の脈と合ったらピッタリだったんです。リズムが速くなったら僕の脈も速くなりだしました。素晴らしかったです。

林　私もムックリは本当に良い音を出す楽器だなあと思っていたんですが、森の中で聴いたら素晴らしいでしょうね。

ニコル　それこそ、森の奥深い意味を示していると思います。

林　こういう音楽をもつアイヌ民族についてどう思われますか。

アイヌ民族は北海道の大先輩

ニコル　アイヌ民族はこの北海道の大先輩でしょう。けさ、非常にショッキングなことを聞きました。まさかと思ったんですが、また差別があるそうですね。それはないでしょう。先輩で、奥深い美しい文化があるじゃないですか。日本のもともとの文化と西洋からきた文化は北海道でうまくまざってますね。そこにアイヌ（文化）が入ったら、北海道は最高の場所になります。アイヌの皆さんの意見と哲学と教えをこれから学ぶべきです。

林　お年寄りも実に大勢いますし、意見を聞いて行く必要がありますね。

ニコル　絶対にあります。彼らの教えは、何千年、何万年も続きましたからね。僕も科学者だったけど、素直に北極に戻ります。戻っています。科学に対する理解が深くなったんです。

林　そうですか。きょうは本当に素晴らしいお話を聞かせていただいて、ありがとうございました。

（敬称略・おわり）

小林レンタカー
ダンプ・ユニック・バン
0155 58 5858

帯広の森を視察するC・W・ニコルさん（5日）

十勝毎日新聞
平成4年1月4日

5万分の1の地球
いま、みどりを見つめて

暮らしと森

▶1◀

孫子の代まで宝の山

営林署OBは「荒れ」警告

国有林の冬

人は森に太古の夢を結ぶ。巨大なシダ類が生え、木木が天を衝し、恐竜がわがもの顔に歩き回る。そうした始原の森はまさに命を生み、育（はぐく）む母体だった。

近年、開発の美名に酔れて森の破壊が急速に進んだ。私たちの生活と森の関係は、次第に遠いものになってきたようにみえる。

しかし、破壊が始まりになるにつれ、新たな反省も生まれている。私たちの暮らしにとって森はかけがえのないパートナーではないか、と。今年の年間キャンペーン「5万分の1の地球―いま、みどりを見つめて」は、まず暮らしと森についてまえてみたい。

◇　◇　◇

うなるチェーンソー

冬のヤマは冬枯れに雪ちらし

（作業場）がある。

樹齢は100―120年

足寄、陸別営林署に続き全国で三番目の伐採量を誇る木別営林署でも、七六林班は「宝の山」だ。樹齢百―百二十年の見事なエゾマツ、トドマツが根株・枝

もぬわっていない。ヨ二十歳の時から土場で働いている基幹作業員（ふ）の上杉英道さん（ふ）が三・六㍍の丸太を作る玉切り作業の、チェーンソーを唸かす合間を縫って、とつとつと語ってくれた。

たしかにノコに代わりチェーンソー、馬に代わり重機が

トラクターのごう音がとどろく集材作業＝本別営林署七六林班

入った分、基本は危険と隣り合わせ、自然相手の手作業だ。見てもスパイク付きの長靴は離せない。日中でも氷点下二〇度近いヤマのシバしはほおを刺す。柚夫（そまふ）が伐倒士、基幹作業職員と呼び名を変えても「変わったことといえば公務員になって生活が安定した半面、若い人がいなくなったことかな。」

「計画的に択伐」

「こんなに切ってヤマは大丈夫か」という問いに、百五十人の所帯の本別営林署で、わずか二人の二十代職員の一人、三原隆義主任（ふ）は「きちんと調査して計画的に択伐している。稚幼木も豊富で子孫の代まで大丈夫」と胸を張って答えてくれた。

しかし、ヤマを見たその足で訪ねた陸別営林署OBの朝倉興作さん（ふ）は「ヤマは荒れている」と強調がちに話してくれた。十七歳から昭和六十年に退職するまで五十年間、造林作業に携わり、柚夫で初めて叙勲を受けた人だ。

「昭和二十七、八年ごろは百五十年生から二百年生、直径六、七十㌢のエゾマツが主流だった。今じゃヤマ肌の芽が見えるが、当時は見えないほど雪に覆っていた。川（利別川）の水も、たっぷり流れていたし澄んでいた。」

きちんと手入れを

「荒れ」を直し、本来の豊かな姿を蘇らせるには「経営収支優先じゃなく、金と人手をかけて丹念に手入れ（植林、間伐、枝払い）をすることが大切」と指摘した。「上の人は、きちんと考えてやっているだろうが」と前置きしながら、林野庁から平成二年四月に赴任した下平敦本別営林署長は三十三歳、京大出の若きキャリア。二十一世紀に向けたロマンを感じて林野行政に飛びこんだ。朝倉さんのいう「上の人」の一人は語る。「国有林は林業の側面だけでとらえていいのかと思う。森林の多様な役割は必ず見直されると。」

膝大な赤字を抱え、冬の時代が続く国有林。こうした思いを、市民の思いにどう重ねるかが、「宝の山」の未来を決める。

（つづく）

（高橋　幸義記者）

年間キャンペーン第1部

十勝毎日新聞
平成4年1月5日

5万分の1の地球
いま、みどりを見つめて

暮らしと森

▶2◀

切り倒された防風林

風害のしっぺ返しをくう

農業と森

「ことを見てください」。中田松雄さん（ふ）＝音更町牧田東二線＝が指しボしたカラマツは、根元近くの胡皮がぐるりとされ、幹がむきだしになっていた。植えて三年になるが太さは親指ほど。背丈も一㍍足らず。ヨシ、ヨモギなどの雑草に絡れて、まるで切木の趣いがない。

「ノネズミにやられたのです。もう生長は見込めない」と中田さんの口調も湿っぽい。

「切って失敗した」

中田さんは畑地二五㌶をもつ専業農家。畑の風上にしようと百八十㍍区間に約九千本のカラマツを植林した。それが全滅してしまった。

中田さんが防風林の植林に熱心なのは、畑地を広げるために林を切り開き、かえって風害にさらされたからだ。「今となっては、切って失敗したナー」という反省がこもっている。

春先、日高おろしの強い北西季節風に襲われる十勝は、風害をいかに防ぐかが、豊かな収穫を約束する課題になってきた。

この自然の猛威に立ち向かう切り札が防風林とされてきた。

ところが、原始林を切り開くことから開拓が始まったように、耕地拡大と機械化農業にとって防木は邪魔者だった。

5分の1に激減

中田さんが防風林の植林につれ、防風林は次々と姿を消していった。十勝支庁のまとめによると、耕地を取り囲む防風林は四十年の六千二十七㌶から、平成二年には五分の一の千二百三十七㌶に減った。

特に昭和四十年代以降、大型機械の導入が急速に進む

ノネズミに食われたカラマツ。今春、伐採したあと新たに植林する

なぜ防風林が姿われたのか。同じ音更町牧田地区で二十六・五㌶の畑作農業を営む、鳥内保広さん（ふ）は次の理由を挙げる。

①大型機械を回転させるため、木が障害の要因になる②防風林の作る影が、雪解けと作物の生長を遅らせる③枯れ葉が土壌を酸性にする―。

遮るもののない広々とした耕地は、確かに壮大な十勝を実感する。年間二千億円の実りをもたらす豊かな農業地帯の典型的な景観でもある。

だが、防木の役割は、一方で自然災害に弱い体質を生んだ。昭和五十五年、十勝全域が大規模な風害に見舞われた。秋の収穫期に襲ったこの大風で、作物が全滅する地区も出た。

その後も「発芽したビートが、風にさらされ脱水したみたいになって、補植しなければならなかった」（鳥内さん）といった風害は、二、三年置きに起きている。効率優先がもたらした自然からの新型なしっぺ返しである。

防風林の再認識へ

こうした反省に立って、防風林の役割を再認識する機運が高まった。帯広、芽室、音更、士幌の四市町は、苗木の無料配布などの制度を整え、防風林造成を奨励している。

しかし、手間暇かけて木を植えるより、損害を受けたら農業共済で補償してもらえばいい、というあきらめからか、制度の利用者は年々減っているのが実情だ。

中田さんはノネズミの被害を受けた木を伐採し、今春新たにカラマツを植林する。「農繁期に重なるが、自分の畑は自分で守らないと…」。

自然を利用して災害に立ち向かう。木を切りすぎたことで学んだ苦い経験が、中田さんを植林へかきたてている。

（つづく）

（目黒　晴一記者）

年間キャンペーン第1部

十勝毎日新聞
平成４年１月７日

5万分の1の地球
いま、みどりを見つめて

暮らしと森

▶4◀

植林で水資源を守る

養殖"生誕の地"の二漁協

漁業と森林

「ホタテにしろサケマスにしろ、漁業は自然の恵みのなかで生活の糧を得ている。自然を守る一歩として、水を作る山に木を植えるんです。流氷を待つオホーツク海に臨む常呂漁協（小笠原敬組合長）で、松金勲参事が静かに網走地方の地図を広げた。

増殖場のわき水不足

同漁協が港から約八十キロ離れた佐呂間町勝山の山林三千ヘクタールを取得したのは昭和六十三年。水資源かん養林として植林整備を進め、昨年夏にさらに二十一ヘクタールを買い足した。取得費は約三千七百万円。整備は道戸森林組合に委託し、補助金を受け年間三百万―四百万円を注ぎ込んでいる。

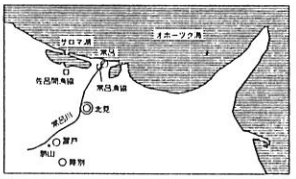
事の発端は、港に注ぐ常呂川の上流に開設したサケ・マス孵化増殖場のわき水不足。昭和五十四年の開設当初は豊富に使えた水が、四年後から減少し始め、水不足のため事業規模が二千万匹から一千万匹に半減した。その"元凶"と目されたのが隣接する山林の伐採。その山を買い、保水力が強いシラカバを中心に約七万本を植樹した。

常呂の隣町にある佐呂間漁協（住吉本二郎組合長）も"山持ち"漁協として知られる。サロマ湖畔から五キロ離れた山林六十四ヘクタールを取得したのが昭和三十四年。以来三十数年、二千七百万円を投入して森林整備に努め、平成二年度には漁業団体としては全国で初めて、森林整備の部門で林業水産大臣賞を受けた。

農業の土作りと同じ

「漁業にとって、山林整備は農業の土作りと同じです」と漁協勤続三十年の猪口徳男専務が胸を張った。

同漁協に共通しているのは、昭和四十年に全国で初めて「漁業と森林」を結びつけた「魚付林」の名で昔から日本では「魚付（うお）林」の名称で海岸沿いの林が残されてきた。その起源は江戸時代以前にさかのぼるが、遠洋漁業が盛んになるにつれ、影の薄い存在になってしまった歴史がある。いまや沿岸漁業の中核をなす養殖漁業が、限られた沿岸の漁場を保全するために積極的に森林整備に乗り出したのは、歴史の反省に学んだ結果でもあったわけだ。



常呂漁協婦人部は昭和六十三年から年一回、道戸の山林に出向いて植樹を続けている

もちろん、常呂漁協がホタテ漁獲量で六年連続日本一を達成、佐呂間漁協は組合員一人当たりの貯蓄が九千万円を超えており、いずれも豊かな台所事情にある点も、先駆的な投資を可能にした大きな要因だったろう。

道漁婦連も取り組み

漁協婦人部の全道団体・北海道漁婦連が創立三十周年記念事業として昭和六十三年に「お魚第七ヤ植樹活動」を提唱、全道的な取り組みが始まった。管内でも広尾、大樹、大津の三漁協の婦人部が植樹を行った。しかし継続的な運動には至っていない。

「わき水の回復には五十年、八十年かかるだろうね」常呂漁協の小笠原組合長は、森林整備の効果について、いともあっさりと言った。その気長いのない姿勢に、未来を見据えた環境漁業への志向が、はっきりと読み取れた。

（松浦　ゆかり記者）

（つづく）

年間キャンペーン第１部

十勝毎日新聞
平成４年１月６日

5万分の1の地球
いま、みどりを見つめて

暮らしと森

▶3◀

重要な木の"保水力"

切り過ぎると災害発生も

牧畜と森

「あんな所に家を建てたシャモ（和人）は、いつかひどい目に遭うぞ」。昭和五十六年八月、北海道中に甚大な被害をもたらした大雨で、日高地方のアイヌ住民が危惧（へ）していたことが現実のものになった。

アイヌの危惧現実に

サラブレッドの生産牧場が広がる日高西部では、いたる所で土砂崩れが発生、住宅や厩（きゅう）舎が押しつぶされる事態が続出した。二十三頭の種馬が死亡したり付属し、三千ヘクタールの牧草地が土砂崩壊と泥流の被害を受けた。ほとんど山と海の間の狭い土地に牧場を開き、そのすぐ下に家を建てていた。

三百ミリ以上の集中豪雨は百年に一度の大雨、といわれたが原因はだれの目にも明らかだった。森や林が切り払われた牧場には土砂崩れを防ぐ力がなかったのだ。災害対策本部長だった当時の木元義彦日高支庁長は、「アイヌの人たちが言っていたことが本当になった」と、一軒の被害住宅も出さなかったアイヌ系住民の土地の状況を見る目の確かさと、本の保水力、表土を抑える力の大きさに驚きを隠せなかった。

ナイタイ高原に異変

地形が平たんな十勝は土砂崩れなどの災害は少ない。しかし、各市町村の広大な公共牧場の育成牧場が、山すそを切り開いて造成され、日高に似た状況が増えつつある。関内氏大のナイタイ高原牧場（面積千六百九十ヘクタール）は、国営大規模草地改良事業として造成され昭和四十七年に完成した。ところが、牧場内を流れるシリクニ川を中心に"異変"が起こった。

川の水位が下がり、わき水も出なくなった。一方で、草地の表土が乾いて、下流の土地住民からは「雨が降ると一気に水量が増え、川があふれる」という苦情が出された。また、牛のふん尿が雨とともに流れ込み、音別川の合流点下流のてん内漁協が取水できなくなるという事態を招いた。草地内に残したカシワの大木も次々に倒れ、割れた。

町は、木を切りすぎたことを反省し、同川周辺に新たにエゾマツ、トドマツを植林した。十年後の今、その効果が表れつつある。同牧場の浅野敏夫係長は「湧水位が上がり、わき水も出てきた。自然が戻ってきた」という。

スーパー放牧を研究

こんな木の力を牧場経営に積極的に利用しようという動きが十勝で本格化しようとしている。十勝西部地区農業改良普及所の川原弘之さんは、栄養豊かな短草を利用した高度集約放牧（スーパー放牧）による増体で低コスト化を研究しているが、ここでカギを握るのが森林だ。

牛に年が最も好む高さ十五センチほどの草を供給し、公共牧場では一ヘクタール当たり二百キロという増体重を五倍の千キロにし、農家的には牛乳の生産コストを一キロ二円ないし三十円に下げようという研究だ。

草にとって水は肥料

川原さんは言う。草にとって水は肥料と同じだ。木はそれを見事にコントロールしてくれる。雨が降れば蓄え、天気になれば供給する。自然の力を利用し良い牧草を与えようとするスーパー放牧には欠かせない存在だ。牧場の居眠と思には必ず森を残し、切ってしまったら植樹して森に変えればいい。景観も悪然良くなる。

（つづく）

（夏川　憲彦記者）

年間キャンペーン第１部

十勝毎日新聞
平成4年1月8日

5万分の1の地球
いま、みとりを見つめて

暮らしと森

▶6◀

50年生カラマツ出荷

木との対話大切に山歩き

篤林家の夢

天皇杯を受賞

「間伐したあとは残された木がいかにも気持ち良さそうな顔をするんですよ。素性のいい木をもっと伸ばしてやりたいからネ。」音更町十勝川温泉の展望台から眼下の長流枝へ向かう林道。カラマツの林の中から立ち枯れしたもの、弱ったものを間伐する作業の手を休めて竹中忠義さん(七三)＝池田町千代田＝は、目焼けした顔をほころばせた。

竹中さんは池田町、音更町などに山林千二百五ヘクタールを持つ。現在、管内の民有林は約十八万五千ヘクタール。経営規模は一町当たり平均十二ヘクタールに過ぎない。竹中さんはその百倍近い規模を持つ十勝有数の篤林家だ。

内容は天然林が五百三十六ヘクタール、人工林が四百九十五ヘクタール。跡継ぎの長男一元さん(三七)、二男、酒起さん(三五)と三人で山を守り、育てる。人工林の計画的な資源造成と長伐期大径木材の育成などが評価され、昭和五十八年には農林水産大臣賞天皇杯に輝いている。現在は間伐材の出荷を中心に約千三百万円の売り上げを誇る。

竹中さんが山に入ったのは昭和十一年。「おやじに帯広（現・帯広市）高一年退学させられて、牧場経営を手伝った。」牧場経営の傍ら、父、忠義さんとともに年間約三万本のカラマツを裸山に植林していった。「カラマツなんて植えても新（まき）にもならない、と近所の人によくいわれたものです」と竹中さん。

終戦後、竹中さんが中国から復員したときは戦後の開拓で炭焚の抗木用にカラマツが間伐され、次々と出荷されていった。「陸口をたたかれたが、結局は植えて正解だったネ。」農地解放のほか「自分は山林だと思っていた」土地まで牧野解放の名で失ったが、それも徐々に買い足し、林業で生きていくことになった。

72歳の今も山歩き

竹中さんは七十二歳の今でもバリバリの現役。息子たちに自分で山を歩く、山が好きなんですよ。毎日が森林浴のおかげで大病は一度もしたことがない。山を歩くと、森が竹中さんにメッセージを送る。「つるを切ってくれとか、少し長いので間伐してくれなど、一本一本の木にじっくりと接していると、手に取るようにわかるんです。何年たったら間伐などと行政は山に入ったことがない人が画一的に計画を立てて行うが、それは本当に木や森にとって適切な時期だったかというと疑問がある ネ。」と、森との対話を大切にしている竹中さんらしい言葉だ。

息子へ、そして孫へ

最近、竹中さんが取り組んでいるのは五十年生以上のカラマツの大木の出荷。父とともにはかこまれながら植えた木が見事に生長した。昭和五十八年には誇らしい自宅に五十三年生、直径約六十センチのカラマツを使った。長い風雪に耐えたカラマツは、心配された狂いもなく、建築材として活用できるめどが立った。「カラマツは狂うといわれるが、五十年以上たつと他の木材と変わらない。この五十年生が毎年出荷できれば、世間のカラマツを見る目が変わってくるはず」とカラマツの有効利用に自信を深める。

価値がないといわれたカラマツ林が長い年月を経て“宝の山”に生長した。「植林前の丸裸の山に、こんな大木の森を夢見て育てできたかいがあった。若木を手塩にかけて育て、立派な森を造る。私たちの代から息子へ、そして孫へと伝えていきますよ。」大木の森を見つめて、五十年がかりではぐくんだ夢が実現した。そしてこの、竹中さんは次の五十年にさらに夢の翼を広げている。

（おわり）

（東　譲業記者）

樹齢五十年以上、直径六十センチのカラマツの大木と竹中さん

年間キャンペーン第1部

十勝毎日新聞
平成4年1月9日

5万分の1の地球
いま、みとりを見つめて

暮らしと森

▶5◀

森は社会に残す財産

未来への思いやりを生む

林業グループの夢

「初めはね、収入を得たらみんなで海外旅行でもするか、なんて話していました。今は違います。林業は社会に財産を残すことだと考えています。だから、後継者の育成が大切」＝個人的資産づくりから地球環境としての森づくりへの変化。酒内を代表する市民の林業グループの一つ、清水緑森会の藤田憲会長(五八)＝酒店経営＝は、たゆみなく生長する森を見守りながら「社会の財産と後継者」を強調した。

「子や孫の代に」

製材に使える木の育成には最低三十年。一年ごとに収穫する農業とは違い、林業は長い年月を必要とする“金と時”の問題がかかる。間伐は樹のいいものを残し、約二十六ヘクタールで分収林を設定、同五十一年から三年間でカラマツ約六万五千本を植樹した。

「子や孫の代」を考える。それが未来への思いやりへと発展するにはそれほどの時間を要しない。

現在、十勝管内の林業グループは十九団体二百人。清水緑森会は昭和五十年三月、町内の農業、商業、会社員など十二人で結成。清水市街から西に約八キロ。“緑森会の山”は、現在では直径十五センチほどのカラマツ林に姿を変えた。町との分収契約は三十年。今後の長伐期太径材指向を考えると、伐期延長の検討も必要だ。

丸坊主の山を森に

「丸坊主の山だった」という清水緑森会は昭和五十九年から町内全域を調査し、「カラマツ人工林の施業指針」を作成。森を「良い林地」「やや良い林地」「努力すると良くなる林地」の三タイプに分類、四十年後を予測した。“緑森会の山”自体は三番目のタイプ。林地としては決して良くない場所だった。

林野庁長官賞に輝く

昭和六十年度には林野庁長官賞を受賞、これを契機に、清水町林業後継者育成基金を創設、後継者の育成を最重点課題として活動している。同基金は全国初の民間主体型の林業基金。約三百人から、九百万円の募金が集まった。過日の利息が出り、昭和六十二年に「清水緑友会」「グリーン・クラブしみず」が相次いで発足、若手が育ちつつある。

森林浴コースや作業道路の整備、研修活動にも取り組み、平成元年には“緑森会の山”の中に研修施設として「カラマツ荘」を手づくりで建設、会員の親ぼくや研修の場、子供たちの森林教室の場などとして活用されている。

森を育てる喜び

分収林は当初、白らの農業以外の資産としての山づくりにウエートがあった。しかし、現在では、森を育てる喜びと夢が大きな意味を持つ。緑森会の会計を務める星野亜さん(三七)＝呉服店経営＝は「森の中でキノコの栽培も始め、楽しみが増えた。生長する木を見るのはわが子が大きくなるみたいでね。街を離れ、山に行くと心が休まるんですよ」と話す。

星野さんの言葉は、熱いの場としての森が現代人にとって大きな意味を持つことを物語っている。藤田会長が強調するように、街に次の、そして森林資産として森を育てる喜びと夢が大きな意味を持つ。緑森会の会計を務める星野亜さん(三七)＝呉服店経営＝は「森の中でキノコの栽培も始め、楽しみが増えた。生長する木を見るのはわが子が大きくなるみたいでね。街を離れ、山に行くと心が休まるんですよ」と話す。

また次の代の林業資産として森を考えるという思考パターンが、こく普通のこととして根づく効用が林業グループの活動にはあるといえよう。

（つづく）

（武内　哲記者）

昭和五十一年の植栽作業（上）。（現在の“緑森会の山”。「丸坊主だった山」が森を形成しつつある

年間キャンペーン第1部

第18回帯広の森市民植樹祭

十勝毎日新聞
平成4年5月17日

青空の下〝森づくり〟

市民ら7千人が汗

大分緑の訪問団も参加

大分訪問団を迎えて行われたイチイの記念植樹（左から高橋幹夫帯広市長、安東保大分市助役、一万田忠彦岡市議会副議長。右手前は岡田重帯広市議会議長）

市民の手で帯広のグリーンベルトを！。第十八回帯広の森市民植樹祭が、十七日午前十時から帯広の森（南町南八）で行われた。広がる青空の下、市民、ミスみどりら、大分市緑の親善訪問団の一行など千人余りが植樹作業に汗を流した。植樹後は今年で十回目を迎えるブルーグラス・コンサートが軽快なリズムを森に響かせ、参加者は思い思いに春の〝植樹の一日〟を楽しんだ。

帯広の森は、市街地を四百二・五ヘクタールの森林で包む計画。昨年十月に行われた育樹祭を機に「育てる」という観点も重視され始め、今年の植樹祭は、市民の憩いの場としての快適な森づくりの原点を問い直す機会ともなった。

帯広の森野球場西側の式典会場で行われた開会式では高橋幹夫市長らの主催者あいさつに続いて、大分訪問団の安東保大分市助役が「帯広の一大イベントに参加させていただき光栄です」と述べ、森の少年隊の神慶人君（帯稲田小五年）が「二十一世紀には見事な森が生まれるでしょう」と植樹宣言し、植樹に移った。

植樹会場では、帯広ユネスコ協会（奥谷信美子会長）ら百七団体のほか、家族連れなどの一般市民がスコップを振るい、大分市のミスみどり、十勝のすずらん娘も往復のすそを気にしながら植樹し、新たな三ヘクタの森に植樹の輪が広がった。

植樹後は、式典会場でブルーグラス・コンサートやミズ・メークイン・コンサートが行われた。今年から登場したスポーツ気球試乗会やホーストレッキングも人気を集め、順番待ちの長い列。午後二時ごろまでにぎわいが続いた。

大分の親善訪問団囲み歓談

歓迎レセプション

第十八回帯広の森市民植樹祭に参加するため帯広市を訪れた大分市緑の親善訪問団を歓迎するレセプションが、十六日午後五時半から帯広グランドホテル（帯広市西二南三）で行われ、団長の安東保大分市助役ら四十五人の訪問団を高橋幹夫帯広市長らが歓迎し、親善の輪を広げた。

高橋市長の歓迎あいさつに続いて安東団長が「市民、行政レベルの交流で両市の親ぼくを深めることを切待します」と述べた。帯広市議会の岡田建三議長副委員長、大分市議会の一万田忠彦副議長、朝倉善一植樹祭実行委員長が、帯広観光協会会長の発声で乾杯。歓談のあと、大分合同新聞社の松岡征一郎業務部次長の万歳で宴会のうちに閉会し

あいさつする高橋市長

十勝毎日新聞
平成4年5月17日

帯広の森に広がる笑顔

市民植樹祭 イベントや宴も活気

森の少年隊は今年も植樹祭の主役。今年は神慶人君が植樹宣言した

緑への夢、広がる笑顔！。帯広の森市民植樹祭は今年も大成功だった。参加した市民グループは百を超え、汗を流した人は七千人。この人数は「自分たちが住む街の財産を築く」という意識が市民の間に浸透したことの表れであり、いまは〝五月の市民交流の場〟。植樹作業のあとはイベントに宴（うたげ）…。帯広の森は午後二時すぎまで市民の笑顔と歓声に包まれていた。

今年も〝常連組〟が多かったが、三友町内会もその一つ。今年は四月からホームステイしているフィンランド出身のテオ・コポネン君（七）＝芽室西校二年＝と南米ベネズエラ出身のレニー・ブランコさん（八）＝南商二年＝の二人の顔も。テオ君は「祭り、おもしろそう」と不慣れな日本語ながらも心弾んだ様子。ダンスが趣味のレニーさんはブルーグラスのリズムに合わせ、照れながらダンスをしていた。

また、「帯広明るい社会づくり運動推進協議会」（荻原昭勝会長）は第一回目から参加している。今年は六十人が参加。谷敏忠担当委員長は帯広の森の将来について「植える場所が年々無くなっていることが非常に心配。また、ただ緑をつくるのではなく、植えた後の手入れも必要。間伐して市民が森の中に入っていけるよう遊び道をつくってほしい」と話していた。

一方、大分から四十四人を連れて来帯している安東保助役は地元から持参してきたイチイガシを一本ずつ東に植樹。こんな広大なプラットフォームが開かれ、アメリカからボストン・アコウスティック・アンサンブルが出演。野外コンサートのほか、十六日には勝毎ホールで記念コンサートも。メンバー中、唯一の日本人、有田純弘さん（三）は六年前の池田町のワイン祭りに続いて二回目の十勝。「十勝は、アメリカのカントリーミュージックが生まれた風土とぴったり」と、バンジョーを思い切りならしていた。

東北海道新聞
平成4年7月23日

ゲート、駐車帯設置を

有志グループ 帯広の森整備で提案書

「92帯広の森市民集団」と名付けられた有志グループが、将来の帯広の森整備に関する提案書をまとめ、二十一日、高橋幹夫市長に手渡した。歓迎ゲートや駐車帯の設置、児童会館の移設、水源の確保といった具体策が豊富で、市が今年から策定する帯広の森利活用計画にも反映されそうだ。

同集団は帯広の森市民植樹祭実行委員会事務局、道造園建設業協会十勝支部技術委員会、風土と建築を考える会、景観デザインの高野ランドスケープの四団体で構成。四月から意見交換を行い、同事務局次長で山田建設社長の山田英和氏らを「市民が求める交流、遊び、快適性などを提供し、十六人がこのほど提案書をまとめた。

それによると、帯広の森基本計画に都市基幹公園としての機能が満たされることが必要」とした上で「帯広の森から千勝の森へ」と意識、機能の拡大を目指す。

造成の方向としては①面積の拡大と緑のネットワーク化（帯鹿川―札内川、帯広川―十勝川のグリーンベルト整備、緑ケ丘公園とのつながり）②森と道路の一体整備（駐車帯の設置、柴通り北側入口部分の歓迎ゲート化）③園路計画（百年の道づくり）④植栽計画（見本学習林、果樹園、キノコ林の造成）⑤水をつくる（小川、湿地の保護）などを挙げている。

また、利活用の方向について①専門機関・施設による拠点づくり②マチを一望する第五森林区への各種研修施設設置（児童会館の移設など）③森のなかでも相談窓口の設置④協力団体、個人のネットワーク化―などを提言し、施設整備の方向に関しても「駐車場のアスファルト舗装を浸透性のある素材に替え、雨水を地面にもどす」など具体例を挙げている。

山田氏は「市緑化審の論議では自然保護の観点が強すぎる。帯広の森の整備を行政任せにしないで、市民もともに考え、参加していく姿勢が問われている」と話している。

提案書を手にする山田氏

植樹祭にりゅう太君登場

植樹祭でイベントをPRしたりゅう太君とミスみどり

十七日に帯広の森（南町南八）で行われた帯広の森市民植樹祭に、みどりいむ'92のキャンペーン・ガール「ミスみどりいむ」の三人とりゅう太君が登場しイベントを盛り上げた。

大分市の親善訪問団の一行にも好評で、事務局スタッフも「南商・九州やおもおくさんが加れること間違いなし」。式典会場に勢ぞろいした四人の中で、だれよりも機嫌だったのはりゅう太君。大分市ミスみどりの三人と「みどりいむ」のミスみどり四人の七人のミスに囲まれた「男くさいい？」と声をかける高橋幹夫帯広市長もうらやましそう。

子供たちにも人気のりゅう太君。ヨチヨチ歩きで恵うように会場を移動で きなかったが、緑色の姿を緑の森づくりに参加した市民にアピールし、植樹祭の盛り上げに一役買っていた。

▽会期　7月25日（土）、8月23日（日）、午前9時―午後6時
▽会場　帯広市緑ケ丘公園（メーン会場は旧陸上競技場の約4ヘクタ）
▽入場料　一般千二百円（当日千五百円）、高校生八百円（同千円）、小・中学生五百円（同六百円）

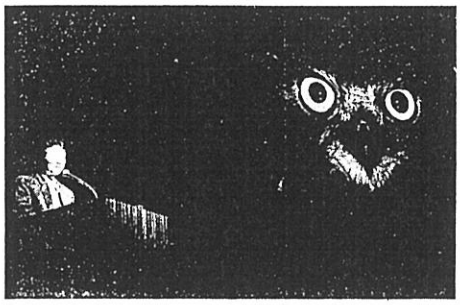
みどりいむ'92まであと69日

十勝毎日新聞
平成4年7月15日

森の再生目ざして

年間キャンペーン環境シンポ

嶋田忠氏講演



シマフクロウのスライドを背に講演

十勝毎日新聞社が展開している環境キャンペーンにちなみ十三日、帯広市民文化ホールで開いたシンポジウム「いま、みどりを見つめて」主催・十勝毎日新聞社、後援・帯広市、帯広市教育委員会、風土と建築を考える会、協賛・三洋興熱株式会社は、危機にさらされている自然をどう再生するか、について貴重な提言がなされた。動物写真家の嶋田忠氏と元環境庁事務次官の金子太郎氏の講演内容、風土と建築を考える会代表の山田哲氏、酪農家の高浅優子氏を加えた討論会、さらに嶋田氏と林光繁・本社編集局長の対談を紙上で採録する。

自然に謙虚な姿勢で

自分でできること実行を

＞1＜

帯広を訪れたのは十年ぶりになるが、計画的に木を植えている様子がうかがえて、いい印象を持った。今、いろいろなところで木を植えたり、景観を求める動きがあるが、美を求めるのは、生き物の習性。その点で、人間も野生動物になってきたのではないかと思う。

自然のバランスは実に見事で立っている。それを「変じゃない、バランスがいい」と感じるとき、人間の心は純粋になる。みんながそれに気付き、求め始めたのはよてもいいことだ。

講演する嶋田忠氏

阿寒の自然がなぜ荒らされたのか。周辺の土地を持っていた故・前田光子さんで、例えば、山の木一本でもどこから見てもいいバランスで、例えば、山の木一本でもずに済んだか。周辺の土地を持っていた故・前田光子さんが、阿寒の美しさを感じたからに違いない。前田さんの心にある美意識が、今の「前田一歩園」を造った。自然の造形美を感じた人がいたことが、阿寒の幸せだった。

私は子供のころから鳥が好きだったが、「かわいいから好き」というのではなく、自分のライバル、自分より上位のものとして畏敬（いけい）の念を持った。自然保護運動も「保護する」という思い上がった傲慢を捨てなければ、あんなにヒステリックにならずに済む。自然に対する謙虚な姿勢が必要だ。

自分のために

環境についても、「地球が危ない」と騒がれるが、地球の“衣（ころも）”が悪質から人間に変わったという、表面上のことに過ぎない。「今、自分のために」という素直さが大切。子孫に豊かな自然を残そうなんていうのではなく、いま現在の自分にとって重要なことだから、と考えるべきだ。私が鳥を飼っているのも、自分の快感のため。その快感を育つ者、育を育つ者は許さないという素直な気持ちで対処している。

そうした意味で、二、三年前からポッポと土地を買いはじめた。例えば、シマフクロウのためには餌（えさ）場となるサケの産卵場が必要になる。そういう土地を買う。売ってくれなければ借りる。そこで酒を飲みながらシマフクロウを眺める。これが最高の

心が洗われる思いだった。アイヌが最高の神（カムイ）としたのが理解できた。シマフクロウは餌さえあれば生きていける。ただ隔離するだけでは駄目で、もっとサケやマスをそ上させて産卵場を造ることが大切だ。

今、手を打とう

私は写真展のときには、登八枚分くらいの写真を展示するが、シマフクロウに出合ったときの感動を伝えるためには、東京ドームに目玉だけ展示しても足りないくらいだ。

樹り返すが、今必要なのは自然保護を訴えるだけではなく、自分でできることを実行に移すことだ。別荘を建てるぜいたくではないか。

私が北海道に住むようになったのは、アカショウビンを掘りたかったから。この鳥に対しては闘争心がわく。すべて重要なことだから、と考えるべきだ。私が鳥を飼っているのも、自分の快感のため。その快感を育つ者、育を育つ者は許さないという素直な気持ちで対処している。

小林レンタカー
0155-
24-
3344

（つづく）

十勝毎日新聞
平成4年7月16日

森の再生目ざして

年間キャンペーン環境シンポ

金子太郎氏講演

「緑の再生産が大切」と強調する金子太郎氏

前田一歩園とかかわる私と道東のかかわり合いは人設立の相談を持ちかけられた。前田さんは元宝塚ガールで若くして夫をなくし、子供

開発の時代終わった

身近なところから緑を

＞2＜

昭和五十三年春に前田一歩園財団の故前田光子さんとお会いした時からである。当時、環境庁の自然保護局長をしていた私の元に、前田さんが訪れ「夫がこよなく愛した阿寒の自然を残したい」と財団法人設立の相談を持ちかけられた。前田さんは元宝塚ガールで若くして夫をなくし、子供もいなかった。だから自ごろ財団の故前田光子さんとお会いした時からである。当時、環境庁の自然保護局長をしていた私の元に、前田さんが訪れ「夫がこよなく愛した阿寒の自然を残したい」と財団法人設立の相談を持ちかけられた。前田さんは元宝塚ガールで若くして夫をなくし、子供もいなかった。だから自ごろ財団の故前田光子さんとお会いした時からである。当時、環境庁の自然保護局長をしていた私の元に、前田さんが訪れ「夫がこよなく愛した阿寒の自然を残したい」と財団法人設立の相談を持ちかけられた。前田さんは元宝塚ガールで若くして夫をなくし、子供もいなかった。だから自ごろ財団の故前田光子さんとお会いした時からである。当時、環境庁の自然保護局長をしていた私の元に、前田さんが訪れ「夫がこよなく愛した阿寒の自然を残したい」と財団法人設立の相談を持ちかけられた。前田さんは元宝塚ガールで若くして夫をなくし、子供もいなかった。だから自ごろ財団の故前田光子さんとお会いした時からである。当時、環境庁の自然保護局長をしていた私の元に、前田さんが訪れ「夫がこよなく愛した阿寒の自然を残したい」と財団法人設立の相談を持ちかけられた。前田さんは元宝塚ガールで若くして夫をなくし、子供もいなかった。だから自ごろ財団の故前田光子さんとお会いした時からである。当時、環境庁の自然保護局長をしていた私の元に、前田さんが訪れ「夫がこよなく愛した阿寒の自然を残したい」と財団法人設立の相談を持ちかけられた。前田さんは元宝塚ガールで若くして夫をなくし、子供

危機にひんする山林

財団法人の設立に関しては、現在は労賃分が赤字となっている。前田財団は阿寒湖温泉の権利を持っており、その温泉を販売することで赤字の穴埋めをしているほか、十条製紙の釧路工場長に理事となっていただき、間伐材をチップとして買い取ってもらっている。不況下でも雇用、比較的高値で買い付けてもらい、「一つの企業メセナ」と感謝している。

人手不足と労賃の高騰は山林を荒らしつつある。下草刈りも行われず、山林は荒れていく。山林が荒れたら、財団法人設立の目的を達成できない。財団法人設立の目的は、阿寒の自然を残すことだ。

ものがある。山林労働者が減少し、その労賃が高騰している。木材市況が低迷している現状だ。日本の山林は重大な危機にひんしているといえる。

グローバルな視点で

北海道の森林を考えたとき、厳しい自然環境がその生長を阻害する。三重県の尾鷲市では「酷暑林業」と呼ばれる。二十年で伐採まで林業が行われているほか、[illegible]では風が強いだけに防風林は必要だ。防風林を二重、三重に育てることで、リスやウサギなどの動物が戻ってくる。もっと間伐の世代交代が終わり、身近な山から、緑を再生産する時代にしたいと思う。

（つづく）

だが、北海道ではカラマツ、トドマツの大木を育てようとすると百年はかかってしまう。北海道と気候が似ている北欧では過去の大量伐採の経験を生かし、大木は決して切らない。寒冷地での緑の保護は温暖な地より数倍の時間と資金が必要だ。

また、近年は酸性雨の被害が報告されているが、それ以上に深刻なのが酸性雪の問題である。雨と違い、積雪は分だけ幹や根が酸性の被害を受けやすくなる。酸性雨、酸性雪に関しては、日本だけでなくグローバルな視点から考えなければならない。

大蔵省で森林予算を担当していた昭和三十年代によく訪れた十勝を現在と比べると防風林の減少が目立つ。十勝は風が強いだけに防風林は必要だ。防風林を二重、三重に育てることで、リスやウサギなどの動物が戻ってくる。もっと間伐の世代交代が終わり、身近な山から、緑を再生産する時代にしたいと思う。

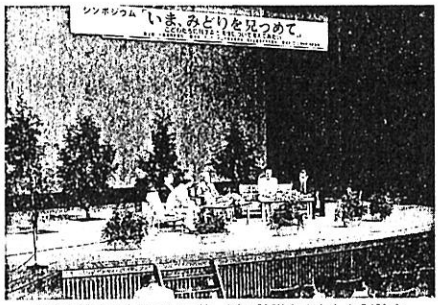
（つづく）

十勝毎日新聞
平成4年7月17日

森の再生目ざして

年間キャンペーン環境シンポ

討論会（上）



十勝の緑の再生について熱っぽい論議を交わした討論会

出席者
元環境庁事務次官　金子　太郎氏
動物写真家　嶋田　忠氏
風土と建築を考える会代表　山田　哲氏
酪農家　湯浅　優子氏
コーディネーター　エコネットワーク代表　小川　巌氏

＞3＜

十勝の緑づくりに行動を
心に余裕でき周り見直す
自分から動くことが必要
食べ物あれば動物は適応

山田氏　湯浅氏　金子氏　嶋田氏

十勝毎日新聞社の環境キャンペーンシンポジウム「いま、みどりを見つめて」の討論会は、パネリスト四氏が、それぞれの立場から貴重な提言を交換させた。（文中敬称略）

小川　緑の再生へ地元ではどんな取り組みを。

山田　帯広では帯広の森に市民が木を植えるなど、緑の再生が始まっている。風土と建築を考える会の活動は十勝を中心にした地域づくり。町の中の緑や農村景観を議論、計画する。さらに行動が伴う。その一環として新聞、ラジオ、テレビ、ビデオ、ホームページ、ゼミナールでは、風建考、農支研なども新しい発信があった。

湯浅　これまで家の周りを見る余裕がなかった。景観ゼミを通して農村景観だけでなく農業そのものを考えるようになった。

山田　十勝全体の土地利用や空間利用は全体として見えてこない。帯広などの中心部では緑被率の向上に努め、農村では屋敷林や防風林の整備を進める。

湯浅　農村と緑は結びついていないといけない。これまでは、生産設備を増やすのに公害問題が発生したという苦情がある。同じように「国や県庁が何かやってくれるのでは」というのではなく、自分から動くことが必要。その意味で十勝の動きは良いこと。

嶋田　郷里の埼玉県川越市は武蔵野の一角だが、今ではすっかり住宅地になっている。父が「あのケヤキを残しておけばよかった」と言う時がある。ふるさとを思い出すとケヤキの大木を思い出す。その周りで遊ぶと安心感があった。御神木のようなもの。木をたくさん植えて、その中から大木や神木を作っていくのは楽しい。帯広の都市や農村で木を植え始めていることはうれしい。

小川　「農業は自然との闘いだから木を切り倒しても構わない」ということを言わない人が出てきた。大規模な農業が行きすぎとする考え方もあったことがそのきっかけになったのかも。

山田　景観ゼミでは女性の力が大きかった。風建考には女性メンバーが二人しかいないので、今後は女性を増やしていかないと。

湯浅　農村の生活や農家の心に余裕がない点が見直されてきたのは、農業情勢が関連するが、生活や家庭を楽しくするのは女性の力による。

金子　道内には二十万人程度の町が多い。環境や居住性を考えるうえで最適。ドイツでは大きな都市がないためにどこにセカンド・ハウスを持てる。環境を整える方向へいかにエネルギーを持っていくかが大切。

小川　きょうの話では自然を守るだけでなく、なくなったら作っていくという点が従来の考え方と違う。

金子　「だれかがやってくれる」ではなくて、いかに（自分から）災際の行動に移していくかが問題。

嶋田　都会でタカが増えている。（えさとなる）食べ物があれば、動物は短時間で適応する。カワセミは、一時的に減少しても十年ぐらいで数が戻る場合もある。（つづく）

十勝毎日新聞
平成4年7月18日

森の再生目ざして

年間キャンペーン環境シンポ

討論会（下）

出席者
元環境庁事務次官　金子　太郎氏
動物写真家　嶋田　忠氏
風土と建築を考える会代表　山田　哲氏
酪農家　湯浅　優子氏
コーディネーター　エコネットワーク代表　小川　巌氏

金子　太郎氏

嶋田　忠氏

山田　哲氏

湯浅　優子氏

小川　巌氏

＞4＜

十勝の自然大切に守ろう
防風林に広葉樹も加えて
これからは〝森林思考〟で
家の周りの鳥偏ってきた

金子氏　嶋田氏　山田氏　湯浅氏

小川　十勝には緑がいっぱいある。緑を考える場合、緑被率ではなく、どういう動物がすめるかが問題。いろいろな動物のすむ緑は人間にとってもプラス。

湯浅　私も最近そういうことに気がつくことがある。ハトやカラスなど、家の周りに集まってくる鳥の種類が偏ってきている。付近の木がカラマツだけになっているからだと思う。景観ゼミに出ていた切性から聞いた「四十年前の新聞なら家の周りの林にシマフクロウがすみ、何本ものカシワの木があった」という話と比べると、生態系が変わってきているとわかる。（田舎物の）東京から来た時は自然が素晴らしいとしか思わなかったが。

山田　西部三町のほか、帯広市や更別村でも景観を考える動きがある。たんなるファッションになることが心配だが、一つの流れができつつあることは確か。イギリスで環境を改善する運動として「グランド・ワーク・トラスト」があるが、今進んでいる動きもそのようなものに関係ある。十勝全体、北海道、地球というレベルで景観のモデルをビジュアルな形で提案したい。

金子　国有林にはカラマツやヒノキなど二種の樹種からなる森がある。これでは動物がすめないので、実のなる木を植えないといけない。そういう知識を持って実行すればいい。

嶋田　森を通る道の上に、エゾリスのための橋を造った話がある。そういうのは良い。地下にキツネのためにトンネルを掘ったらどうか。

（文）防風林に広葉樹を加えれば動物がすみやすくなる。

小川　防風林には古いものが多い。そういう木を切る機会に広葉樹を植えて森に変化を与えたらどうか。

湯浅　農村景観を考える時が出てくるだろうが、その場には、価値観を変えることが必要。自然の中で仕事をする素晴らしさに気づき、もっと農業に自信を持たなければ。

小川　まとめの言葉を。

嶋田　帯広はきれいになった。町の郊外に住む人が森にかかわっていくというのはこれまでにも見ていたが、農家の人自身が見直していくと

いうのはほほえましい。故郷の農家は野菜は植えるが、木は植えなかった。こういう動きが全道にひろがればいい。

金子　経済人の目で見ると、これから十勝は大きく発展する。経済的に大きなプロジェクトが来ると、自然が大きく傷むことがあるが、傷ませてはいけない。

湯浅　きょうは景観ゼミ生二十一人の代表のつもりで来た。少しずつでも生活を見直して自信を持っていけば、十勝の自然は良くなるのではないか。

山田　これからの緑や地域を考えると〝森林的思考〟が必要。すぐに思白つけるのではなく、進っていることをおたいに考えていく。二十一世紀までに答を出せれば十分。緑を中心にした地域づくりに努力していきたい。

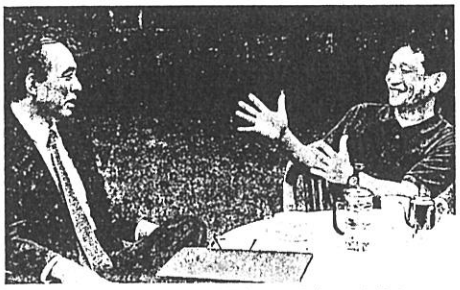
小川　十勝で進む景観づくりや地域づくりは、十勝にとと手らずこれから全道のモデルになっていくのではないか。地球レベルの議論の間に、足元の議論をしないといけない。十勝で進む実践が大いに役立て

十勝毎日新聞
平成４年７月19日

森の再生目ざして

年間キャンペーン環境シンポ

＞5＜



「山からマチへ緑でつなげたら素晴らしい」と語る嶋田氏。左は林本社編集局長

対談（上）

動物写真家　嶋田　忠氏
本社編集局長　林　光繁

身近に自然の動物を
森づくりは人間のため

原始林は幻想

―嶋田さんは、ファインダーを通して自然を、見つめていらっしゃる。森に入る機会が非常に多いのですが、十勝の自然についてどう見ていますか。

嶋田　十勝は、ぐるりを山の緑で囲まれていますね。その形がとてもいい。ただ、これは北海道全体に言えるのですが、本当の自然林は雪とか知床の一部を除いて、もうない。本州の人間があこがれるような原始林の北海道というのは、幻想に過ぎないんです。

―ほとんど手が入っているということですね。

嶋田　一、二回は伐採されています。自然の森は美しい。しかし、それをいま乱んでも現実的じゃない。人間が手を加えて、いかに自然に近い美しい森を再生していくか。十勝は三方を山に囲まれているから、そうした再生事業を他に先駆けてできる条件を持っていると思います。

動物写真家の嶋田忠氏と林光繁本社編集局長との対談は、小鳥たちが遊び来るホテル北海館の前庭でおわれた。鋭い口を持つ嶋田氏が、鳴き声で種類を言い当てるなど、リラックスした雰囲気で対談が続いた。

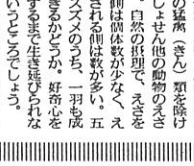
山と都市をつなぐ

―平野部の方はどうですか。

嶋田　平野部で大切なのは、山と都市部とどうつながり、都市から農村部、農村部から山へと森がずっとつながっていたとしたら、生き物たちが行き来できます。そうしたら、マチにいながら、いろんな動物たちとの触れ合いが楽しめる。そういうことがやりやすい地域が、十勝だと思います。

―帯広の森構想が、まさにそうです。日高の山すそからマチ部までを緑のつなぐという壮大な計画です。

嶋田　防風林をつなげていって、動物たちの通り道を日高からマチまでできたらいいでしょうね。何も動物たちのためというんじゃなくて、人間にとって、身近に自然の動物たちがいたら、楽しいですよ。森をつくるというのは、人間のためなのです。



―ところが、動物たちの通り道は、道路で寸断されているのが現状です。

動物の通り道を

嶋田　例えば道路の下に土管を通すとか、工夫次第で通り道を作ることは可能です。動物たちは、最初は利用しないかもしれないが、好奇心の強い若いのが使い始めたりしたら、広がるのは早い。全体で学習するんです。

―好奇心が学習につながるというのは、人間でも同じですね。嶋田さんが、専門としてらっしゃる鳥はどうですか。好奇心を持っているのでしょうか。

嶋田　鳥の場合、そこまでは分からない。鳥はタカなんかの猛禽（きん）類を除けば、しょせん他の動物の えさです。自然の摂理で、えさを取る側は個体数が少なく、えさにされる側は数が多い。五羽のスズメのうち、一羽も成長できるかどうか。好奇心を発揮するまで生き延びられないというところでしょう。

嶋田氏は野生に生きる鳥たちの生態を追い求めて既に二十年になる。対談は、ファインダーを通して、鳥たちに対峙（たいじ）する嶋田氏のプロとしての姿勢、ヒグマと接近遭遇した経験などに展開していく。

（つづく）

十勝毎日新聞
平成４年７月20日

森の再生目ざして

年間キャンペーン環境シンポ

＞6＜

林編集局長

対談（下）

動物写真家　嶋田　忠氏
本社編集局長　林　光繁

自分でやれることを
理屈じゃなく行動が大事

―鳥を撮るときは、仕事意識というか、使命感みたいな気持ちがあるのですか。

嶋田　いや、それはまるでないです。僕は十五年間、自分で撮りたいものしか撮らなかった。だから、仕事しているという意識はないですね。撮りたい鳥のデータを集めて、先回りしていいチャンスを狙おうと思っても、それが通用しない。鳥との張り引き、だましあい。その快感が楽しいのです。

嶋田氏は、例えば四十点の作品集を作るとき、倍の八十点程度しか撮影しないという。「これだ」という一瞬のチャンスを粘り強く待ち、瞬時に切り取る緊張感が、迫力ある作品を生んでいる。

―撮影するときは、どんな手順を踏むのですか。

人間の上を行く自然

嶋田　まず、作品を頭の中で構成して、絵コンテを描きます。映画の手法と全く同じです。僕の場合、必要ないものは撮らない。もっともコンテで描いたものより、必ず上を行くのが自然ですね。何かしら予期しないことに出会う。

―嶋田さんの作品には夜、撮影したものが多いように思います。

嶋田　それは、夜間活動する動物は、夜に撮るということでしてね。例えば、「キタキツネ物語」という映画があり、あの映画では、昼間のキツネしか出てこない。昼間は人間という最強の動物が、すべて追われて、鳥が激減したと言えます。しかし、北海道については、必ずしも当てはまらない。例えばシマフクロウは、最近の調査で百羽以上いるときいていますが、僕は三百羽はいるんじゃないかと踏んでいます。

―クマはどうですか。

激減するヒグマ

嶋田　これが一番問題です。ヒグマが、激減している。森に入って、習慣に慣れを感じるのは、とても大切で、ある種の緊張感が快感にもつながる。それがない森になってきているのは、とても残念です。

―撮影中、クマに遭遇したことは。

嶋田　ええ、ありますよ。一番近くまで来たときは、二、三メートルくらいだったかな。コンパネで作った箱の中にいたんです。鳥がすぐそばで動こえる。のぞき穴から手を入れてきたら、ナタで手の割れ目をなぐろうと構えていた。いなくなると、ほっとしましたがね。

森に入るときは、緊張感で入れと嶋田氏は説く。森は、緊張と期待で胸が高鳴る怖い場所だから魅力があるという。

―原始の森は、なくなったが、人手を加えて何とか緑を再生していこうという動きが出てきています。

まず足元から

嶋田　いまは、理屈じゃなくて行動が大事です。お金を出せる人はお金を、動ける人は木を植えたりといった、自分でやれることに取り組む。地球全体のことを言っても実感が伴わない。まず、足元からやる。そうした機運が十勝でもっと盛り上がれば素晴らしいですね。

（おわり）

嶋田　忠氏

大きく育て帯広の森

十勝毎日新聞
平成４年10月11日

おんなの視点

帯広の森市民育樹祭実行委員

大滝智子さん

「多くの緑残したい」

小さいころから木や緑に囲まれた中で遊ぶことが好きで、小学五年生の時、担任の先生から森の少年隊のパンフレットをもらったことがきっかけで十三年間、緑や花にかかわってきました。今年になって市のみどりと花の課の人に誘われ、九月から新たに帯広の森市民育樹祭実行委員として、活動することになり、積極的に参加し、意見をどんどん出していきたいと思っています。

◇　◇　◇

昭和四十一年帯広生まれ。六十年札幌の短大へ。大学卒業後、帯広へ戻り、六十三年からラジカラー帯広に勤務する。趣味は茶道。子供と遊ぶことが好きで「すぐ子供と同じレベルになって遊んでしまう人です」と話す彼女からは優しい人柄がうかがえる。

◇　◇　◇

「作る森」から「育てる森」へ―ということで帯広の森育樹祭が昨年から本格的に始まり、実行委員会が発足したのは今年九月から。育樹祭は委員長の林光繁氏を中心に植樹祭の時に植えられた木々を間伐や除伐などを通して森への関心を深めることを目的としてえで意見を出し、これからの子供たちに少しでも多くの緑を残していきたい。そのために、育樹祭や森の少年隊のなかでの自分でやらなければならないことをこれから見つけ出していきたい。

◇　◇　◇

今ある緑をなくしたくないし、小さな木々が育っていくのを助けて、見守っていきたい。そしてできるだけ、時間の許す限り緑にかかわり、ずっと続けていきたいと思っています。だからも、これからの育樹祭や森の少年隊の活動の中で自分の生き方を考えていきたいと思っています。

（徳本　明子記者）

「育てる森」―育樹祭には六百人の市民が参加

秋晴れの下　市民育樹祭

除伐・間伐　600人汗流す

十勝毎日新聞
平成４年10月18日

「作る森」から「育てる森」へ。第二回帯広の森市民育樹祭が、十八日午前十時から帯広の森（南町南八）で行われた。先月旗揚げした同祭実行委員会（委員長・林光繁十勝毎日新聞社副社長）が主催する初めての育樹祭。秋晴れの下で、昨年の五百人を上回る六百人が秋の森に分け入り、除伐・間伐に汗を流した。

（17面に関連記事）

昭和五十年に整備が始まった帯広の森は、総面積四百二・五㌶。過去十八年間の帯広の森市民植樹祭で、これまで七十九・二㌶に十五万本を植えてきた。育樹祭は、その「森」を間伐・除伐によって整備するもので、一昨年にプレ育樹祭、昨年には初の育樹祭を行った。今年の育樹面積は約二㌶で、昭和五十二、五十三年に植樹した部分。

昨年は、植樹祭を行う帯広の森市民植樹祭実行委員会（棚瀬善一委員長）が主催団体を兼務したが、今年は、同実行委員会委員や建設・造園関係者らで先月二十八日に植樹祭実行委員会を組織、主催団体を整備してのスタートとなった。同実行委員会では「実行委員会を分離することにより、市民の間に育樹の意識が浸透しやすくなる」としている。

この日は、事前に申し込んだ二十七団体五百人余りのほか、午前九時からは一般市民の個人参加受け付けも開始。静かな帯広の森が徐々に歓声に包まれていった。

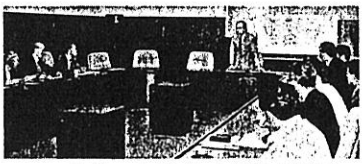
関会式では、高橋修夫市長が「森づくりは、マチづくりに対する市民の心意気を示すもの」と育樹祭の意義を強調。林委員長は「帯広の森をしっかり育てあげると、帯広は素晴らしいマチになるだろう」とあいさつ、帯広営林支局職員が下枝払いや除伐の方法を説明した。森の少年隊の舌東宏美さん（こ一明星小五年）が「きょう、私たち市民の手で、育樹作業をすること」を宣言します」と育樹宣言し、育樹がスタート。参加者は「ここは切ってもいいのかな」などと話し合いながら、余計な枝にノコギリを入れ、林間をすっきりさせていった。

創作きもの　美匠　本店

帯広の森

作るから「育てる」へ

市民育樹祭　実行委が発足



「作る森」から「育てる森」への転換となる帯広の森市民育樹祭が昨年から本格的に始まったが、同祭の実施主体となる「帯広の森市民育樹祭実行委員会」が、二十八日午後七時から帯広市民文化ホールで開かれた実行委員会で正式に発足し、実行委員長に林光繁氏（十勝毎日新聞社副社長）を選んだ。帯広市と共催して育樹祭を運営していく。

正式に発足した帯広の森育樹祭実行委員会

十勝毎日新聞
平成４年９月29日

植樹した樹木の間伐や除伐などを通して森への関心を深めることを目的とする育樹祭は、一昨年十月にプレ育樹祭を行い、昨年十月に第一回を行った。

帯広の森市民植樹祭実行委員会（棚瀬善一委員長）の主催だったが、「育樹祭と植樹祭が同じでは混乱する」との声が挙がり独自の実行委員会が設けられた。

この日の実行委員会で就任あいさつに立った林氏は「緑を大事にする〝重緑主義〟が大切。知恵と心と汗の三つを基に、育樹祭を永遠に続けていきたい」と抱負を語った。

林氏以外の役員は次の通り。（敬称略）

▽顧問＝棚瀬善一、飯島靖幸、星久保吉正、渋谷洋一、鈴木隆（以上道園建設業協会十勝支部）、三日市則昭（エゾリスの会）、大滝智子（森の少年隊）▽事務局長＝山田哲（山田林業）

今年の育樹祭は来月18日

参加団体受け付け

第二回帯広の森市民育樹祭が、十月十八日午前十時から南町南八線の帯広の森で行われる。

同祭実行委員会（林光繁委員長）と帯広市の主催。会社・サークルなどの団体での参加は十月五日が締め切り。個人や家族での参加は、当日会場で受け付ける。枝打ち用のノコギリを持っている場合は、持参。参加者には記念品として折り込みノコが贈呈される（八百人まで）。

問い合わせ、参加申し込みは市みどりと花の課（24）4111内線1841。

十勝毎日新聞
平成4年12月8日

年間キャンペーン第4部

森をつくる

＞1＜

5万分の1の地域
いま、みどりを見つめて

国営昭和記念公園

独歩の「武蔵野の森」復元

国土緑化事業は、戦争で失われた緑の回復を目的に始まった。それが今、市民参加型の植樹が全国に広まり、都市公園の整備や環境浄化の追い風に乗って、各地で森づくりが進められている。帯広の森は、そうした構想の中でも規模の雄大さと思の長い計画で全国的にも注目されている。連載の最後は、森づくりに取り組む各地の実情のリポートと、帯広の森の発端から将来像までを描く。

◇　◇　◇

戦後、米軍基地に

「武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしてはならない。どの路でも足の向くままゆけば必ずそこに見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある」(国木田独歩「武蔵野」より)。

住民から愛されながら、戦後、米軍基地となり、姿を消した東京・立川市の「武蔵野の森」。この森を国営公園の敷地内で、一部復元しようという計画が進んでいる。

武蔵野の原風景創出

国営昭和記念公園は、建設省所管の都市公園事業。米軍立川基地の返還を受け、昭和天皇在位五十周年を記念して、昭和五十三年から事業着手した。

武蔵野の森の復元は、住民からの要望は特になかったが、「歴史計画をつくる段階で、有識者から意見を聞き」(鈴木修二建設省都市公園係長)、基本方針に「豊かな緑と深い樹林を基調とし、武蔵野の景観を蘇生させる」と盛り込んだ。公園北側十五ヘクタールの「森のゾーン」に、もともとあったコナラ、クヌギ、ケヤキ、ブナなどを植林し、以前の武蔵野の原風景を新たに造り出そうというものだ。

関東地方建設局国営昭和記念公園工事事務所で働いた。「森の造成は、昭和六十三年から。七年ごろに完了する予定で、森のゾーンはまだ開園していないが、西側の五ヘクタールで植林が済んでいる」(彫本信明調査設計課長)。土を盛って小高い丘を造り、そこに苗木を植える作業が続いている。

今までに約二百五十億円の事業費をかけ、総面積百八十ヘクタールのうち、現在約六〇%の百二十四ヘクタールが一般に開園。JR立川駅から歩いて十分、都内では貴重な広大な公園として諸施設を備え、昨年の入園者は家族連れなど百五十四万人を数えた。

数年後には、植林も終わる。今はまだ小さい苗木が新しい「武蔵野の森」として根づくのは、いつか…

本格整備これから

森道は一部出来上がり、米軍基地時代からあるアカマツやイチョウなどの大きく育った木も、景観計画に沿って移植しているが、「本格的な整備はこれから」(同)。木の移植があるので、数十年もかからないで「それなりの形になる」(同)という見通しだ。

雑木林の中には、昔の農家や納屋、畑を模した「武蔵野の里」の復元も計画。「単なる森でなく、武蔵野の景観そのものを市民に提供したい」と彫本課長は言う。それとともに、「自然保護という観点だけでなく、散策、レクリエーションなど都市公園としての利用を考えた森に」。

帯広の森と違い、市民の植樹祭はやっていない。反対もなければ賛成もなく、住民の往自度はいま一つ。ブルドーザーでの盛り土がたんたんと進む。今後も、植樹祭をやるかは分からない」(同)。

目につく地肌

武蔵野を愛した作家、国木田独歩は「武蔵野には決して秃山(はげやま)はない」と書き、自然と生活が密接した場所と強調した。今はまだ当時の面影とは遠く、細く小さい苗木では地肌ばかりが目につく。公園に隣接した自衛隊立川駐屯地からは、ヘリコプターがひっきりなしに飛び立ち、空を揺らす。「遺られた森が再び生活に密接するのは、いつだろう」。秃山に登ってそう思った。(つづく)

(吉田　隆佳記者)

十勝毎日新聞
平成4年12月9日

年間キャンペーン第4部

森をつくる

＞2＜

5万分の1の地域
いま、みどりを見つめて

襟裳岬の森

"砂漠"によみがえった緑

開拓前は広葉樹の森

日高山脈の南端が海に沈む所、襟裳岬。沿岸道路を走れば冬だというのに青々とした森が両側に続く。高台に立てば、海の青、空の青とその森とのコントラストがまぶしいぐらい。年間五十万人もが訪れる目の前の絶勝地に見とれていると、案内役の浦河営林署えりも治山事業所主任、西井酒昭さんの言葉がさえぎった。「ここはかつて、えりも砂漠と呼ばれたほどのはげ山だったんです」

襟裳岬は明治の開拓が入る以前、カシワやミズナラ、ハルニレなど広葉樹の原生林が広がる緑豊かな地だった。ところが燃料用や家畜の放牧のために切り続け、イナゴの大群の襲来もあってむき出しのはげ山になった。赤土が岬特有の強い風に舞い、その土は海を汚し魚は減少、コンブなど海草類も根腐れを起こして取れなくなり、人々の生活を圧迫した。

草も生えない地

戦後の国土緑化の一環として、襟裳岬に緑をよみがえらそうと、昭和二十八年、植林事業が始まった。治山と海岸砂防の両方にかかわった唯一の人物として見込まれ、山形の酒田営林署から浦河営林署のえりも治山事業所初代所長になった米川正夏さん(78)＝帯広市在住＝は「草もないあんなひどい土地は初めてだった」と思い起こす。表土を安定させるため牧草を植えても種が飛んでいってしまう。浜辺に打ちつけられるコダ(雑海草)を種の被覆材料に使うアイデアで日本有数の強風地帯に緑を根づかせる事業に立ち向かった。

なかったのに、春には花が咲き、ウグイス、カッコウ、ヒバリも来る」とコンブ漁の傍ら、事業初から参加作業に従事する阿田芳雄さん(78)は目を細め、米川さんが「足を運ぶのが楽しみになった」と、かつての砂漠を知る人が驚くほど緑がよみがえった。緑の蘇生はコンブ、魚介類を海に呼び戻し、豊かな海は生活の安定に結びつき、都会へ出た若者たちのUターンを生んだ。

生長しないカシワ

しかし課題は残る。「ここは昭和三十六年にクロマツとカシワ、イタチハギを植えたのですが生長したのはクロマツだけ。どうしてもカシワはある程度の高さで止まってしまう。以前は広葉樹の森だったのに…」。カシワは一本あるかないか。クロマツにしても普通三十年たてば二十メートルくらいになるが、風にいじめられ、谷間の比較的風の弱い場所で五、六メートル。

また、クロマツ一種類だけでは病害虫が発生したとき、全滅する恐れがある。せっかく育てた森を失うことのないよう広葉樹も五、六メートルまでに生長したクロマツの林。高井さんの案内で足を踏み入れると、うそのように風がなくなった……

育てていく必要がある。初めて間伐を試みたという場所では、アオダモやカンバ、ナラなどがクロマツの陰で根づいていた。「私たちが期待しているのはこれなんです」と高井さんは小鳥が種を運び自然に育っている幼木をいとおしむように指さした。

50年、100年先を

「まだこの森は若い。人間でいえば十代。活力ある永久的な森林にするために、この先、五十年、百年を見据えた森づくりが求められているんです」(市毛啓三浦河営林署長)。自然に木が育ち広葉樹が茂る森になるには、さらに長い時間と労力が必要なのだ。(つづく)

(杉田　郁子記者)

十勝毎日新聞
平成４年12月10日

年間キャンペーン第４部

森をつくる

＞3＜

グリーンストームの森林

貴重な緑の遺産を後世に

アカエゾマツを植樹

新得町の市街地から車で約三十分。十勝ダムの山一つ隣側に、わずか一ヘクタールのアカエゾマツの造林地が広がる。木の高さは大人の背丈ぐらい。か細い幹が、それでもしっかり根を張って年々生長を続けている。

周囲の山から見れば全くミニの造林地だが、グリーンストーム部分林組合（高橋文介組合長、六十七人）のメンバーにとっては、まさに〝オレたちの森林（もり）〟だ。昭和六十年、マチに住む組合員と家族が、地元の西十勝森林組合に助けられて二千本のアカエゾマツを植林した。以来、この造林地は「グリーンストームの森林」と名付けられ、組合員をしっかり結びつける絆（きずな）になってきた。

グリーンストームの森林は、国有林地を借りて植林している。期間は昭和六十年から平成七十二年までの七十五年間。植林したアカエゾマツが、ちょうど伐期を迎えるまでの長い契約だ。三、四十代が中心の現在の組合員は、生長した樹木の切り出しを自らは見ることはないだろう。「それでも子や孫、ひ孫たちに貴重な緑を伝えることができる」（高橋組合長）。しかもその樹木は、マチに水と酸素を供給する源となる。緑の遺産を後世に贈ることは、環境保全にも大いに役立つ。

環境保全にも役立つ

組合員は帯広市内の経営者、弁護士、会計士、会社員など多岐にわたる。「自分たちで見守っていく木があればいいなぁ。市民の一人として、空気や水の浄化に少しでもかかわっていけた」（田中琢旭製器社長）というのが、組合員に共通した感情だ。いわば、自分の子供の成長を楽しむような思いが底流に流れている。

森林組合に管理委託

組合員は年一度、〝オレたちの森林〟の生長を見に出かける。紅葉の時期、レクリエーションを兼ねて家族で山に入る。途中の牧場で羊の丸焼きをほお張り、子供たちは焚火を楽しみ、大人はフィトンチッドいっぱいの空気とともにビールを飲む。山持ちのおおらかな気分が高揚する一日だ。

植林をしたあと二、三年は下草刈りなどの手入れが必要だ。しかし、山については素人の組合員にカマを持っての作業はきつい。しかも、マチに仕事を持つ人ばかりだ。そこで、山の管理は西十勝森林組合に委託している。組合員一人ひとりが負担する委託料は年間二千円。「オレは山持ちだ、と東京の友人に自慢できる」（高橋組合長）代償が二千円なら安いものだ。

夢は数十年後に

グリーンストームの森林は、林野庁の分収造林制度に忠実して誕生した。国民参加の森林づくり事業としては、一口五十万円を出資して森林を国に育ててもらい、将来の収益を国と分ける分収育林が知られている。一方、分収造林は自らも植林し、育てる点で育林よりも参加の色合いが濃い。「制度としては、戦後間もなく始まり、学校林や記念林など十勝管内で四十九カ所、七百二十五・四六ヘクタールあります。しかし、公募で決まったのは、釧路・根室を合わせた帯広営林支局の管轄下で、グリーンストーム部分林組合だけ（管理課）。それだけ組合員の森林づくりに懸ける意欲が高いと言えそうだ。

孫たちが、自分の植えた木に登る。森に探検に入る…。組合員の夢は数十年後に羽ばたく。

（つづく）

（目黒　精一記者）

トラック・バス・レンタル
高木レンタカー
帯広622-1　☎25-5057

5万分の1の地球
いま、みどりを見つめて

「これがオレたちの森林」。組合員はレクリエーションを兼ね、年に一度現地を訪れる

十勝毎日新聞
平成４年12月13日

年間キャンペーン第４部

森をつくる

＞4＜

故吉村元市長の夢

「帯広の森」産みの親

近代的田園都市目指す

「目が潤んでいた」

「スコップを持つ吉村さんの目が、心なしか潤んでいましたね。自分の夢がようやく実現に向け動きだしたと、感激もひとしおだったのだと思います」

昭和五十年六月一日、「帯広の森」の第一回植樹祭。当時の田本憲吾市長の心遣いで、真っ先にカシワの植樹をした故吉村博元市長の姿を小林豊・市代表監査委員は、まるできのうのことのようにくっきりと思い出す。小林さんは、帯広の森が計画決定されたときの公園緑地課長。計画の策定に当初からかかわり、苦労を重ねたひとりだ。

植樹祭を伝える本紙（二月付）は吉村氏が「私の五期目のグリーンプランを発想するこの事業が、このように市民の皆さんの手で実現の運びとなったことに、心からお礼を申し上げたい」と感慨を込めたメッセージを述べた、と記している。

吉村市長の夢―。それは、帯広のまちをグリーンベルトで包み、ヨーロッパの都市に似た近代田園都市をつくることだった。

ウィーンでヒント

吉村さんが著した「風雪有情」（新時代社刊）に次のくだりがある。

…二百年か三百年かけてうっそうたる樹（かしわ）の森林、楡（にれ）の林を、つくろうと思う。何代か後の市民がこの巨木の下で、いこいのひとときを送れるなら、しあわせである。さらに、白樺（しらかば）の林、桜の園、果樹園、子供の遊び場、老人のための原っぱ、青年の体育場など多、幅五百五十㍍のグリーンベルトに散在させる…

吉村さんは田園都市構想のヒントを、ウィーンの視察から得たとされている。ウィーンは森の中に抱かれたまちである。ここで過ごす間に、帯広の森の原構想が生み出されたと伝えられる。

吉村さんの頭に浮かんだ帯広の将来イメージを具体化する作業に取り組んだのは、発足したばかりの公園緑地課のメンバーだった。

小林課長の下で係長を務めた上鹿渡武治・都市開発部次長は次のように話す。

「森のまち」復元へ

「当時、国の公園整備五カ年計画が出されて、市としても独自の緑化計画を作れ、と若山（正男）建設部長から指示がありました。昔の地図を見ると、帯広は森のまちだったのですね。これを何とか復元できないか、と思ったのです。」上鹿渡さんは、四十七年ごろ、係長クラスと市長との夕食会の席で、このことを話した。市長はわが意を得たばかり、構想の具体化を命じたという。

議会で反対論噴出

これを建設省の若手官僚がバックアップした。四十八年度予算に国庫補助事業として三億九千万円が認められた。

ところが、「帯広の森」計画が三月議会に提案されると反対論が噴出した。生活環境整備を遅らせてまで森づくりをやる必然性があるのか、というのが主な論点だった。予算の執行は凍結され、議会に調査特別委が設けられた。初の公聴会も開かれた。

そして四十八年十一月、かんかんがくがくの論議を経て、わずか一票差で計画は採択された。「その夜、市長が私たちに、七人をすきやきで慰労会を開いてくれました。計画は大難産の末やっと日の目をみることになったのです」（小林氏）。

「帯広の森」生みの親の吉村さんがどんな思いで植樹の場に臨んだか。目が潤んでいたという小林氏らの証言から推し量るしかない。

（つづく）

（目黒　精一記者）

第１回の植樹祭でカシワを植える故吉村市長

5万分の1の地球
いま、みどりを見つめて

十勝毎日新聞
平成4年12月14日

年間キャンペーン第4部

森をつくる

＞5＜

森の少年隊

帯広の森支える人作り

昭和52年に設立

「帯広の森構想が百年がかりなら、われわれの活動だって百年がかりですよ。だって人間を育てるんですから」。子供たちを森づくりに参加させたい、という目的で生まれた森の少年隊の帯山茂事務局長(三)は今までの取り組みを振り返る。昭和五十二年四月に設立。以来、植樹祭参加や自然キャンプ、森林の育成など森を通して自然の大切さを学んできた。

スタートは「帯広の森を市民ベースでいかに活用するか」という議論だった。ハードである帯広の森をソフトである人づくりから支えよう―という気持ちから、帯広青年会議所やローターアクトクラブなどの民間団体が設立したもので、学校関係は小学校五年生から二年間。

体験学習を通じて

活動の拠点はもちろん帯広の森。設立以来、市民植樹祭に参加するほか、戦前はどこでも見られたカシワを森づくりに生かすため、秋にドングリを拾い、帯広の森苗圃(ほ)に植える。それを翌年の植樹の苗木として用いるなど、体験学習を通して自然とのかかわりを深めてきた。

五年ほど前には隊員数の減少に悩んだが、植物写真をパズル化して共同作業で完成させるなど、遊びの要素を取り入れ、子供たちに魅力のあるものとしている。

600人を超えるOB

十五年を経て、OBは六百人を超える。OBのうち、数人はジュニアリーダーやリーダーとして隊を支える立場となっている。一期生の大滝智子さん(二)もその一人だ。「四年前に帯広に戻って来て、現在は副団長です。自分たちの時と違って、最近は遊びを通して自主的に森を考えるようなプログラムになって来ました」と話す傾向は歓迎している。

その成果は「森の草刈りをしていた時、隊員が仲間に声をかけ、ごみ拾いを始めた」(大滝さん)エピソードとなって表れている。また、プログラムの内容の充実が図られた近年は出席率が八割を超えている。帯山事務局長は「塾や学校行事などとより、体験学習の方が楽しいと隊員は口々にいいます。ボランティアの大人が〝いかに子供たちに楽しんで学んでもらうか〟を考えた成果だと思っています」と意欲的に活動を進める子供たちを温かい目で見詰める。

子孫に森の大切さを

帯広の森の将来を考えるとき、その活用が大きな問題となる。大滝さんは「多くの人が利用することはいいんですが、残念ながらマナーの悪い人が多い」と表情を曇らせた。生長しつつある帯広の森に対して市民のマナーは成長途中といったところか。帯山事務局長は「今後も年間三十人が卒隊すると、百年後には三千人を超える。この森を育てる心を持ったOBが増えれば市民の帯広の森に寄せる思いが深まると期待する。

「少年隊は帯広の森を育てるとともに、帯広の森に育てられているんです。自然を愛することにつながる。そのOBが子孫に森の大切さを少しでも残せたら、ハードもソフトも立派な帯広の森になっていくはず」。帯山事務局長はすくすくと育つ子供たちに似た、若い帯広の森の木を見詰めていた。

(つづく)

(東 輝素記者)

体験を通じて帯広の森を育てる森の少年隊(今年の市民育樹祭)

新築・リフォーム
秋田建設
東15南3
☎23-6808

十勝毎日新聞
平成4年12月17日

年間キャンペーン第4部

森をつくる

＞6＜

十勝の森へ

世界見据え夢のデザイン

3分の2が知らない

帯広の森について興味深い一つの調査がある。帯広のタウン誌「ふるさととかち」が今年、高校生からお年寄りまでの百人を対象に市民アンケートをとった。帯広の森造成計画の存在を知っているのはわずか三十三人。三分の二はどんな構想の基に造られているのかを知らない、という意外な結果が出た。

一方で、アイスアリーナ、野球場、陸上競技場などスポーツ施設所在地としての知名度は非常に高かった。森そのものとしてより、地名としてのイメージが市民に浸透しているようだ。編集長の佐藤欣則さんは「帯広の森はマチづくりと切っても切れない計画。若い層にも森がまだ住民から遠い存在であることを認めざるを得ないようだ。

利活用計画策定へ

「木が育ってきたし、自然の林相に近いところもある。でも、入って行く公園気でないし、森本来の楽しさを味わうものがない」。帯広市緑化環境部長の加藤正秀さんは、今の帯広の森をこんな言葉で表現する。同部は、森に関するさまざまな計画を立て、管理するセクションだ。そのトップに計画を知らない人が多かったが、マチづくりそのものが浮かついてきている」との表れではないか」と分析する。

意味ある育樹祭

市民の一部では既に動きが始まっている。第一回の市民植樹祭から実行委員として携わり、今年七月に高橋幹夫市長に新しい造成計画などを提言した翌帯広の森市民集団代表の山田英和さんは「全体の中で、どのあたりに位置づけられるかは一概には言えない。ただ、少しずつ進んでいるということは認識できる。都市公園的機能を市民にサービスできる森が求められている。昨年から育樹祭がスタートしたのは、大きな意味があること」という。

二人の話は、森づくりが、新しい位置づけを求められているのを物語る。市はそれにこたえるため、五年度中に「利活用計画」をまとめる。年度内に市民グループの提言、庁内若手グループのアイデアなどを基にたたき台をつくり、緑化帯に勝りながら抜本的な方向を打ち出すことにしている。

世界的な評価得る

新たな位置づけは、十勝の森そしてより広い世界を見据えたものになりそうだ。昨年十二月、エソリスの会と十勝毎日新聞社が共催した「森との語らい」で講演したろ角さんと元東大演習林長、高橋延清さんの言葉をもう一度かみしめたい。

「帯広の森は四百ヘクタールの夢のデザインです。みんな少し焦ってはいないでしょうか。枯れた木が一本もないが、自然のままの面があってもいいのでは。そうすれば人間もバラエティーに変化して付き合えます。あと五十年もたてば世界的にも評価される素晴らしい森になるでしょう」

(夏川 憲彦記者)

同時に「世代を超えたマチづくり、地域づくりのシンボルであることに変わりはない。ぼくにとって、十勝が大好きという気持ちを形に表すのが帯広の森づくり。だから、十勝全体の土地利用計画の中で考えたい。例えば、芽笹にも新得にも鹿追にも地域の森があってき、それを結ぶようにしたい。十勝どころか、地球市民のための森づくりにもつながる。とにかく一生の仕事としてやりたい」と続ける。

今年の年間キャンペーンはこれで終わります

帯広の森を見る高橋延清さん、作家のC・W・ニコルさんら(1991年12月)

十勝毎日新聞
平成５年10月10日

100年後の市民に残せる森に

日曜インタビュー

雄大な構想の継続を

森づくりはマチづくりと同じこと

17日に行われる帯広の森市民育樹祭事務局長
山田　哲さん(46)

市民が森をつくり、育て、楽しむ―。四百ヘクタールを超える「帯広の森」に懸ける市民の期待は大きい。「市民の手で森をつくろう」と、昭和五十年に始まった市民植樹祭は既に十九回を重ね、延べ約九万五千人の手で十六万五千本の木が植えられた。そして、三年に「森を育てる」という視点から育樹祭が始まった。十七日には、市民六百人が参加して今年の作業が行われる。山田哲市民育樹祭事務局長に「市民による森づくり」について聞いた。

子供たちの積極参加を

―市民植樹祭、育樹祭は市民の緑を考える場になっていますね。

植樹祭が始まって十九年ですから、例えば、最初の頃参加した子供たちが今では植樹祭、育樹祭を問わずに、事務局サイドで活躍しているんです。「帯広の森」は百年後を見通してのくり、結構子供たちに人気があるんですよ。参加したから、それを継続させていくために、将来、帯広を背負って立つ子供たちが積極的に参加してくれる形でなければなりません。育樹祭は、実際に森の中に入って枝払いや伐採、間伐という作業をするわけですから、木と触れ合う機会も多い。流して楽しそうに作業している姿を見るとうれしくなります。十七日は多くの人に参加してほしいですね。

―「森を育てる」育樹祭という構想は以前からあったのですか。

十年ほど前でしょうか。三年前、実施に移しましたが植樹、育樹が一セットになったことで、市民が野鳥観察、キノコ狩り、また、ごみ拾いをしたりすることで考え方としては植樹祭がスタートした当初からありました。当然、植樹するだけでは十分でなく、育樹が重要になります。育樹祭の議論を具体的に始めたのは

森と深く付き合い理解を

―森づくりの重要性をどう考えますか。

今までより深く森と付き合い、理解できるようになったと思います。

帯広の歴史全体の中で、今に生きる私たちは重要な立場にあるわけです。現在、帯広が開拓されて百年、そして「帯広の森」の計画も百年。ちょうど中間地点にいるんですよね。百年前には開拓者が木を切り開いて今のマチを築き上げました。私たちは環境を考慮し、百年後の市民のために「どう木を植え、育てていくか」を真剣に考えなければなりません。ここで方向性を間違えたら大変なことになります。自分たちの目で「帯広の森」の完成を見ることはできないかもしれませんが、百年後の帯広市民にあなたの「森」になるといですね。「帯広の森」が管内住民の出会いの中心の場となり、「十勝の森」と言われるような、多くの人に親しまれるような森になってほしいです。「森づくり」は、広い意味では「マチづくり」と同じことなんですよ。森がマチであり、またマチが森の中にある。そんな"絵"が目に浮かんできます。

100年後のため真剣に

十勝住民の出会いの場に

近隣町村や日高山脈にもつながっていくような大きな「森」になればいいですか。

電話「不動産・金融」係の時間
オリビロ！ 1-18 0112-22-5500
坂口商事

〈プロフィル〉昭和二十一年、東京の設計事務所を経て、同四十八年帯広に戻り、山田林業で活躍して二年一月、帯広生まれ。帯広農高から日大工学部建築科へ。卒後、熊谷組に就職。現在は代表取締役社長。妻、まり子さん(三)との間に一男。趣味は以前は映画鑑賞などだったが、今はもっぱら仕事という。

取材を終えて

「森づくりには同世代もの協力と強じんな意志が不可欠な要素。百年のスパンで考えれば、植樹も二割しか終わっていない。焦ったり、気負うことのないように、着実に前進していくことが必要だと思います」。壮大の節々に、使命感を持つ人独特の、確信に満ちた気概がうかがえる。

帯広の森造成計画は、まだ下水などの設備も十分ではなかった時代に、賛否両論のある中で始まった。「私たちは植樹祭、育樹祭を通して森づくりにかかわっている。次の世代は、また新しい時代の中で、恢々的コンセプトを踏襲しながら、新しい事業をどんどん展開していってほしい」と、森に対するたゆまない期待を膨らませている。

（川崎　光記者）

帯広の森 早まる用地買収

今年度は13・7ヘクタール

地価安定で現ペース維持 12、13年にも完了

帯広の森の用地買収は今年度新たに十三・七㌶を加え、買収率は八割近くに達する。このペースを維持すれば、買収期間は当初計画より十年ほど短縮される見通しになった。これを受けて帯広市は、本格的な森の活用面のソフト対策に乗り出す構えで、今年度中に「仮称・帯広の森利活用計画」を策定する。

森の本格利活用へ 市、年度内に計画策定

基本造成計画によると、一八・五㌶は二十二年までに買収する。土地買収は昭和四十八年からスタートしたが、三年度までは年一ケタ台のペースで、早期買収が課題になっていた。

森の総面積は四百二・五㌶で、国有地等を除く三百四十七・七㌶が買収対象。

今年度中に8割近くの買収が完了する帯広の森（昨年の市民植樹祭）

しかし、昨年度の買収面積は十四・二㌶に増加。今年度も約七億三千九百万円の買収費を計上、農地・非農地を含め十三・七㌶を買収する。これにより買収面積は約二百七十七㌶となり、買収率は七九・五％に達する予定だ。

地価が安定傾向にあることから、市緑化環境部では「現状のペースを維持すれば、当初見込みより相当早く、平成十二、三年にも買収が完了する」（加藤正秀部長）と判断している。

森造成のペースが好転したため、市は都市公園として有効活用を検討する。利活用計画はその指針となるもので、緑化審議会等で市民意見を集約し今年度中に策定の予定。市は散策路やパークゴルフ場の整備などを考えているが、「市民が森に対しどのようなニーズを抱いているのかアンケート調査も実施したい」（加藤部長）と話している。

十勝毎日新聞
平成5年4月18日

青空の下〝森づくり〟に汗

帯広の森 市民植樹祭

市民の手で広げる〝森づくり〟の輪―。第十九回帯広の森市民植樹祭が十六日午前十時から、帯広の森（西二二南五）で行われた。十勝晴れの下、約六千人の市民が大分市緑の親善訪問団六十五人とともに計六千本の苗木を植えた。植樹作業後は軽快なフルーグラスの演奏に合わせフォークダンスを踊るなど、参加した市民らは思い思いに春の一日を楽しんだ。

（13面に関連記事）

記念植樹を行う左から安部大分市議会議長、木本大分市水道事業管理者、林帯広観光協会長、大分ミスみどり3人、高橋市長、岡田市議会議長

家族連れなど6千人

「すくすく育って」願い込め苗木植樹

帯広の森は市街地を西二・五㌔の森林で囲む計画。第一回から前回までの植樹祭で、延べ八万七千九十二人の市民らが約十六万本を植樹している。

帯広測候所によると、この日の最低気温は二・五度と平年（五・五度）に比べやや低めだったが、日中はぐんぐん気温が上がり、絶好の〝植樹日和〟になった。

西二三南五の式典会場で行われた開会式は、高橋幹夫市長らの主催者あいさつに続いて、大分訪問団の木本克章大分市水道事業管理者が「森づくり百年の壮大な事業に参加することで、岡市の民間のきずなを深め、岡市の発展に役立てていこう」と祝辞を述べた。続いて、森の少年隊の作山祐子さん（光南小五年）が植樹宣言し、植樹に移った。

広さ約三㌶の植樹会場には、初参加の藤丸エコロジー委員会など九十四団体のほか、一般の家族連れなどが集まった。参加者らは「すくすくと育ちますように」などと願いを込めながら、スコップを手にミズナラやトドマツなどの植樹作業に汗を流した。

植樹後は、式典会場でブルーグラス・コンサートやミス・メークイン・コンテストなどが開かれ、会場は午後二時ごろまでにぎわいが続いた。

大分から緑の親善訪問団

歓迎レセプション開く

第十九回帯広の森植樹祭に参加するため、十五日に来帯した大分市緑の親善訪問団の歓迎レセプションが同日午後六時から、ホテル北海館で開かれた。

レセプションには大分からの一行六十五人と帯広市など約百十人が出席。高橋市長が「帯広は今が一番いいシーズン。北海道の春をたんのうしてください」と歓迎のことばを述べ、団長の木本克章水道事業管理者が「人と人、人と緑の親善を深めたい」とあいさつした。

岡田議会の安部武十議長、大分市議会の安部泰一議長、棚瀬善一植樹祭実行委員長らの一行六十五人と帯広市団長らにすずらん吸が花束を贈呈。林正巳帯広観光協会会長の乾杯の音頭で祝宴に入り、交流の輪を広げていた。最後は大分合同新聞の安部泰一営業開発部長が万歳で締めくくった。

約百十人が歓談した歓迎レセプション

藤丸エコロジー委員会が初参加

○…藤丸は二十日、社内に藤丸エコロジー委員会（藤本幸雄委員長）を設立するが、これに先駆けて同委員会は植樹祭に初めて参加した。

五十人の社員たちが参加。三井幹雄さん（㌢）は「ふだん太陽の当たらない所で仕事をしているので、きょうはのんびりやりたいですね。きょうが来るのを楽しみにしていました」とにっこり。お弁当を食べたあと、全員午後から出社するという。

「植えた木を何年か後に見に来たい」

○…「一度、北海道に来てみたかったのですが、こうした行事に参加できうれしいです」と話すのは、大分市緑の親善訪問団（木本克章団長、団員六十五人）の太田サヨ子さん（㌢）。

帯広の印象を「広くてきれいなところ」と話す。北海道はもっと寒いと思っていたそうで、周りを見渡すと他の団員もけっこう、厚着をしていた。きょうは暖かく、寒さのご心配はなさそうだ。

太田さんは「自分で植えた木を何年か後に見に来たいですよ」とはにかんでいた。

国際色豊かに 外国人も15人

○…市の国際交流課の招待で十勝在住の十五人の外国人が植樹祭に参加。オーストラリア出身で、更別村教育委員会に勤めているロス・バービッジさん（㌢）は「オーストラリアでも植樹祭に参加していました。とても良い行事だと思います。あと日本に一年半いるので、来年も参加します」と話し、帯広市民と一緒になって植樹祭を楽しんだ。

森の少年隊員70人も植樹に汗流す

○…第一回から参加している森の少年隊（大橋正明隊長）の約七十人の子供たちも植樹作業に汗を流した。隊員の一人、瓜生のぞみさん（若葉小五年）は初めての参加「とても楽しかったです。これからもずっと参加したいです」と笑顔いっぱい。また、二回目の参加になる加藤貴久江さん（西小六年）は「木を植えるのが大好き。帯広が緑でいっぱいになってほしい」と心を込めて植え付けを行った。

「木々の役割を認識したい」と植樹宣言をする森の少年隊の作山さん

十勝毎日新聞
平成5年5月16日

「さあ、がんばるぞー」。真剣な表情で作業の説明を聞く子供たち

十勝毎日新聞
平成５年10月17日

帯広の森市民育樹祭

「みんなで森を育てようー」と、帯広の森市民育樹祭は、時折降る雨にもかかわらず、にぎやかに行われた。町内会などの団体をはじめ、木々のすこやかな生長を願う家族連れが参加。秋の一日を間伐、伐採などの作業に汗を流すなど、会場は市民の笑顔と歓声に包まれた。

生長願いさわやかな汗

一家5人で初めて参加

○…「団体だけでなく、個人でもできると言われて来ました」と話すのは森別町幸町、団体職員、大脇茂さん(34)。奥さんの香代子さんと清香さん(森別中一年)、千紘さん(森別小四年)、慶多君(同二年)の一家五人で初参加した。

「下の子が大きくなってやっと家族でハイキングなどもできるようになった。家族で自然に親しむ一日としたい」と仲良く、枝払いに汗を流していた。

環境教育の一環として

○…森の里小学校(酒井良博校長)からは五年生約百人が参加。同校が進めている環境教育の一環として初回から積極的に取り組んでいる。西尾亮教諭(31)は「今年は間伐の授業でも森林と健康というテーマで森の必要性を勉強した。きょうは実際に肌で知ることが目的」と説明。児童の二人、宮沢誠君(二)は「こんなに楽しいとは思わなかった。来年もまた参加したい」と、枝払いに夢中になっていた。

やよい長寿会の8人も

○…やよい長寿会(長坂信春会長)は年間事業計画で春の植樹祭と秋の育樹祭の参加を決めている。植樹祭も初期からの参加で、育樹に対する意気込みもひとしお。今回は八人が参加。手ぬぐいを首に巻き、のこぎりを持った姿が板につき、もうベテランの雰囲気。

「今年は間伐の授業でも森林と健康というテーマで森の必要性を勉強した。きょうは実際に肌で知ることが目的」と説明。児童の二人、宮沢誠君(二)は「こんなに楽しいとは思わなかった。来年もまた参加したい」と、枝払いに夢中になっていた。

村上英俊さん(六)＝帯広市西一八南五＝は「育樹祭に来て、森が大きく育ったのを見るとうれしいですね」と話していた。

帯広の森市民育樹祭

間伐、枝払いに600人奮闘

軍手、のこを手に

昨年上回る参加者 小雨の中、森づくり

帯広の森市民育樹祭(林光繁実行委員長)が十七日午前十時から帯広の森(南町南八線)で行われた。子供からお年寄りまで団体、個人を合わせ昨年を上回る約六百人が参加、あいにくの小雨の中で間伐、枝払いに汗を流した。

(13面に関連記事)

昭和五十年に整備が始まった帯広の森には八十五㌶に樹木約十六万五千本が植えられている。育樹祭は伐採、間伐により、その"森"を整備する取り組みで、三年にスタートした。今年の育樹面積は昨年の二倍の四㌶、昭和五十三年に植樹した部分で行われた。

「大きく育て帯広の森」の願いを込め、枝払いに奮闘するグループ

個人参加受け付けが始まった午前九時ごろには、会場に軍手やのこぎりを手にした市民が集まった。

開会式では林委員長が「森づくりには、皆さんの協力が不可欠です。頑張って帯広の森を育てましょう」とあいさつ。小野芳宏帯広営林支局技術開発主任官による育樹指導のあと、森の少年隊の明石泉子さん(若葉小五年)が高らかに宣言。各員が自分の持ち場に向かった。十五年前に植えられた一㍍足らずのエゾマツやトドマツなどの苗木は十㍍以上に生長。参加者は使い慣れないのこぎりでの枝払いに悪戦苦闘。小さな子供たちは落ちた枝を集めたり、ごみ拾いをするなど育樹に心地よい汗を流した。

十勝毎日新聞
平成５年10月17日

十勝毎日新聞
平成6年4月30日

緑に託す夢

帯広の森20年

＞1＜

「帯広の森市民植樹祭」が今年で第二十回を迎える。帯広のまちを緑のベルトで囲もうという壮大な構想のもとに始まった森づくりには、これまでに延べ九万三千人が参加し、約八十五㌶に十六万五千本を植樹した。間伐などで森の整備を進める育樹祭も三年にスタート。「春の植樹祭」「秋の育樹祭」は共に市民行事として定着してきた。また「帯広の森利活用計画」が具体化されるなど、森が市民の生活の中で活用できる時代になってきている。

一票差の可決

賛成18、反対17票

帯広の森は帯広大西側から芽室町の一部を含めたつつじが丘霊園にまたがる都市遮断緑地帯。百年後の完成を目指し、市民の熱意と努力が注がれている。

今でこそ全市的な取り組みとして盛り上がっている森づくりだが、スタートから必ずしも順調に推移してきたわけではなかった。

故吉村市長が構想

市議会でも賛否渦巻く

故吉村博市長が帯広の森構想を打ち出したのは昭和四十五年。あまりのビッグプロジェクトに賛否両論の論議が繰り返された。市議会に提案されたのは四十八年。審議は実に十四回を数え、その結果、基本構想で四十五㌶が決まった。「賛成十八、反対十七票。「一票差」で決まった」と伝説的に伝えられているが、この採決の総面積七百二・七㌶の約半分に当たる三百三十四・六㌶が決まった。「賛成十八、反対十七票。「一票差」で決まった」と伝説的に伝えられているが、この採決が最後まで意見が分かれている市民の悩みを作った」と振り返る。

その後、何度か区域を変更して、平成五年に現在の四百五・六㌶になった。

「帯広に市民の手で森をつくろう」と植樹する、故吉村博元帯広市長ら（第1回植樹祭、50年6月1日）

いたことを裏付けている。

「市民の夢つくった」

当時、帯広の森調査特別委員会の副委員長だった同原崎新一氏（当時市議）は「用地買収は可能か、森のばく大な管理費用をどうするかなどが論議の中心だった。二十年間は市長の発想が大きすぎて、森づくりの重要性をみんなよく理解できなかった。だが、あの時の決断が未来の帯広にかけ森づくりに必要な土地の取得も曲折を経ながら進んでいる。計画決定面積の市有地以外で土地買収が必要な三百五十一㌶のうち、五年度末までに二百七十七・一㌶（七八・八％）の買収を終えた。

森を楽しむ段階

加藤正秀緑化環境部長は「森づくりの取り組みは帯広全体の共通の認識になってきた。これからは森をつくりながら、森そのものを楽しむ段階にきている。市民一人ひとりが自分の森という愛着を持ち、これからも末永く森を作っていこうという意識を喚起していきたい」と話す。二十年を節目に、関係者は森づくりに対する思いを新たにしている。

十勝毎日新聞
平成6年5月1日

緑に託す夢

帯広の森20年

＞2＜

積極的に森づくりに貢献する森の少年隊。植樹祭参加はその活動の大きな柱だ

延べ9万3千人参加

市民の手で森をつくる

植樹祭の取り組み

森の少年隊を結成

「子供のころ、帯広の森づくりを通じて緑と親しんだ経験が、今改めて森づくりに参加するきっかけになりました。今後も子供たちに緑の大切さを伝えていきたい」。「森の少年隊」の一期"卒業生"で、現在、同隊の副隊長を務める大滝智子さん（三）は新たな思いをこう語る。

「森の少年隊」は昭和五十二年に、帯広の森を通じて子供たちに自然と親しむ機会を増やそうと市内の小学五、六年生を対象に結成された。自分たちでドングリをカシワの苗木に育て、それを植樹するなど森づくりに貢献。大滝さんをはじめ、多くのOBが「帯広の森にかかわりたい」とスタートだった。帯広の森植樹祭実行委員会の委員長を第一回から務めている柳瀬晋一さん（八）は「最初は約五百人からのスタートだった。

しかし、その植樹祭も、企業、官公庁など幅が広がる中で三時間もかけて、百二十本ほど植えましたよ。辺りは全く逆の様色でした」と当時を振り返る。

その後、第二回千百九十八人、第三回二千四人と回を重ねるごとに参加者が増え、帯広開基百年の第八回には全市的な盛り上がりに達した。参加者は六千百三十六人と膨れ上がり、参加団体も学校、老人クラブ、民間企業、官公庁など幅が広がる中で三時間もかけて、百二十本ほど植えましたよ。辺りは全く逆の様色でした」と当時を振り返る。

その後、第二回千百九十八人、第三回二千四人と回を重ねるごとに参加者が増えて、帯広開基百年の第八回には全市的な盛り上がりに達した。参加者は六千百三十六人と膨れ上がり、参加団体も学校、老人クラブ、民間

高校入学記念行事に

五十七年から参加している帯広柏葉高校は最初、生徒会の役員が中心に活動していたが、六十一年から新入生の入学記念行事として植樹祭を位置付け、生徒全員が在学中一回は参加するようにした。高倉裕一教頭は「帯広に残る生徒が多いので、彼らの子供の世代まで向十年という単位で森づくりの意識が波及されていけばという思いで…」とそのいきさつを説明する。

山田英和植樹祭実行委員会事務局長は「毎年参加することが大切なわけではない。五年に一回でもいい。自分が植えた木が育っていく過程を、百年という大きな時間の流れの中で見ることで、もっと帯広の森に愛着を持ってもらえれば、森づくりは成功すると思いま

500人からのスタート

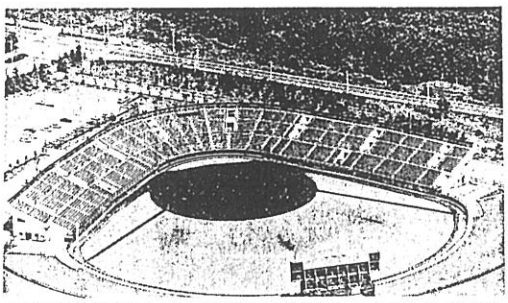
植樹祭を位置付け、生徒全員が在学中一回は参加するようにした。高倉裕一教頭は「帯広に残る生徒が多いので、彼らの子供の世代まで向十年という単位で森づくりの意識が波及されていけばという思いで…」とそのいきさつを説明する。

山田英和植樹祭実行委員会事務局長は「毎年参加することが大切なわけではない。五年に一回でもいい。自分が植えた木が育っていく過程を、百年という大きな時間の流れの中で見ることで、もっと帯広の森に愛着を持ってもらえれば、森づくりは成功すると思いま

確かに、参加団体が固定化し「決まった人しか植樹祭に参加していないのでは ないか」という面がないわけではない。だが、この二十年で市民の理解は確実に深まっている。

トラック・バス・レンタル
高木レンタカー
帯広市西7条北1丁目
☎(0155)25-2567

十勝毎日新聞
平成6年5月3日



森の利活用の場として多くの市民に利用されているスポーツ施設

緑に託す夢

帯広の森20年

＞4＜

「いかに楽しむか」

親しまれる森を目指して

森の利活用

「子どもの遊び場、老人のための原っぱ、青年の体育館などを幅五百五十㍍の中に散在させる。（中略）週休二日制が目の前に来ている今日、しかも健康、体力づくりが叫ばれている今日、小学生から老人クラブまであらゆる人びとが、この計画を理解し、育んで参加してくれるだろうと期待している」

故吉村博市長は自著「風雪有情」の中で、帯広の森にかけるロマンをそう語っている。その理想通り「いかに森で楽しむか」が新しい時代のテーマになっている。

「馬の道」も計画

公園的な利用を促し、市民に親しまれる森を目指した帯広の森利活用計画では「馬の道」の導入も検討されている。十勝馬の道連絡協議会の山口佳男副会長が「潜在的な乗馬人口は三百五十万人もいるといわれている。帯広の森の中に散在させる」ことができれば、帯広でも多くの人が乗馬を楽しめるようになると思います」と期待する。

野外活動の拠点に

花が咲き乱れ人が散策できる「ふるさとの森」、野外コンサートホールがあり市民の芸術・文化のシンボルになる「創造の森」、誕生や結婚などを記録できる「記録の森」、国際レベルの大会キャンプ林間学校ができる「自然の森」―帯広の森はこれを基本に、森林区と運動施設区を八対二の割合に分けて整備が進められている。

運動施設区の野球場や陸上競技場はなくの人に利用され、帯広を代表するスポーツ施設になった。特にアイスアリーナやスピードスケート場などは、今ではスケート王国"帯広にはなくてはならない存在だ。

市が五年度に植樹祭会場で行ったアンケート調査で、四七％の人が「帯広の森を スポーツの場として利用したい」と考えていることからも、市民のスポーツ、野外活動の拠点としての期待がうかがえる。

その一方で、森林区に建てられる国際協力事業団（JICA）の国際研修センターや市の地域交流施設などの大型施設の建設をはじめ、パークゴルフ場などの設置にも賛否両論があるのも事実で、今後森林区への施設には慎重な論議を求める声もある。

何が将来必要か

植樹祭実行委員会事務局の山田英和さんは「森を次の世代から預かっているものとらえて、何を残せるかと考えるのではなく、何が将来必要なのかという視点で考えなければならない」と指摘する。

市民が作り、育て、楽しめる「帯広の森」。この森が未来の帯広の財産になるよう今年の植樹祭は「帯広の森とは何なのか」を考える機会としたい。

（おわり）

十勝毎日新聞
平成6年5月2日

緑に託す夢

帯広の森20年

＞3＜

40種16万5千本

育樹も市民参加で

森の管理

帯広の森には十六万五千本、約四十種類の樹木が植樹されている。トドマツが一番多く針葉樹ではチョウセンゴヨウマツ、アカエゾマツ、広葉樹ではシラカバ、エゾヤマザクラなどが目立つ。昭和六十年からは十勝外来種へ依存している傾向を代表するカシワも増やすなど、樹種の多様化が進められているが、まだ千本以下の樹種も十七種類と多い。今後、森の健全育成の面から郷土種をはじめ、多種に及ぶ苗木の確保が求められている。

第一回に植樹されたのは トドマツ、シラカバ、ハルニレ、カツラの四種だったが、第十回には約三十種、現在は三十九種に増えている。だが、苗木の調達が困難な樹種や活着度の悪い樹種があり、それらが容易な樹種へ依存している傾向がある。

「開拓前の姿に」

野田健治十勝自然保護協会長は「樹種を多様化する と、森に住む虫や小動物も種類が増え、健全な森づくりが進められる。また一つの土地には、その土地の持つ個性があり、開拓前にあった本来の姿に戻してやるという発想が大切だ」と話す。

市は、十勝・帯広の特性を森に生かそうと郷土種の導入を進めているが、カシワは八千四百本、ミズナラは二千二百本とまだ少ない。「共倒れになる恐れもある」のが現状だ。

一方、植樹祭第初の植樹間隔が四回目まで一㍍×一㍍の密植えだったため（樹祭実行委員会（林光繁委員長）が発足し、植樹祭と同じように市民参加で育樹と、二年から間伐などのケア作業を開始。四年には育樹祭も含めて考えなければならない。例えば、鳥では木の上や下に住むものでは種類が違い、細い枝が必要な鳥、下草が必要な鳥への対応が必要だ。「下枝などのむやみな伐採は生態系の破壊につながると指摘する。

「作る森」から「育てる森」へ―。育樹祭で枝払いに汗を流す児童たち

……

祭を行うなど森の管理を進めている。

動物の生態に配慮を

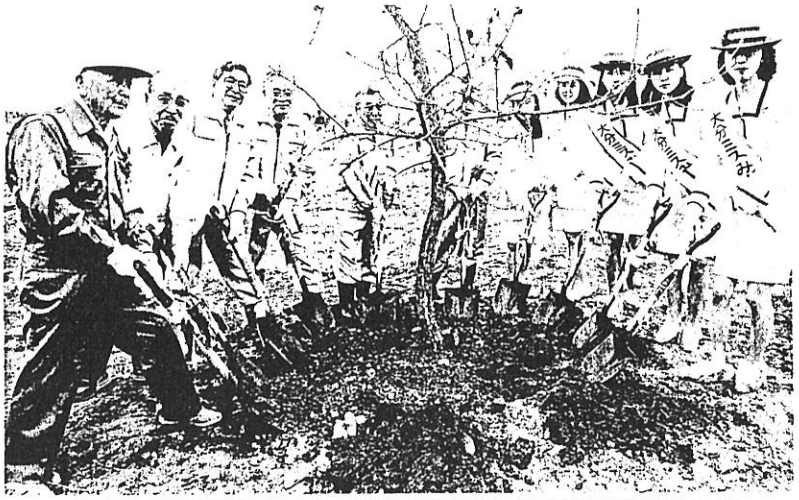
しかし、間伐の方法にも疑問の声がある。藤巻拾蔵帯広市緑化審議会長（帯畜大教授）は、現在行われているのは都市型の公園の整備に近いとし「森づくりはそこに住む動物などの生態についても「間伐材はチップなどにして森の養分にしているが、今後は枝や葉なども森に返してやる検討もしなければならない」と、残されている課題を提起している。

さらに、森自体の生態系

帯広から十勝の森へ

植樹祭、育樹祭と森の中の整備が進むことにより、次のステップは帯広の森を周辺の公園や河川の緑地とつなげて「帯広の森」から「十勝の森」への発展的なネットワークづくり。将来、日高や大雪山につながれば、シカやクマゲラなども帯広の森にやってくるようになる―。夢はとめどなく広がる。

十勝毎日新聞
平成6年5月15日



カシワの苗木を記念植樹する左から、棚瀬菅一実行委員長、林正巳帯広観光協会会長、高橋幹夫市長、加賀稔豊大分市助役、岡田繁市議会議長、安部武士大分市議会議長とすずらん娘、大分ミスみどり

帯広の森づくりに汗流す

カシワやミズナラ7千本

20回目の市民植樹祭

家族、団体ら6千人参加

第二十回帯広の森市民植樹祭が、十五日午前十時から帯広の森（空港南町南一〇線）で行われ、約六千人の市民が植樹作業に汗を流した。曇り空の下、今年はカシワ、ミズナラなど約七千本を四・五㌶に植樹。参加者は植樹の後はイベントに参加するなど、会場は大勢の人でにぎわっていた。

（21面に関連記事）

「市民の手で帯広のまちを森で囲もう」と始まった植樹祭では昨年までに、延べ九万三千人が参加し、約八十五㌶に十六万五千本を植樹した。

この日は、どんよりと雲が広がるあいにくの空模様。午前十時の気温が五・三度と、例年に比べて低めで、日中も気温が上がらず、肌寒い一日になったが、参加者は森づくりに打ち込んだ。

開会式は午前十時から始まった。高橋幹夫市長はあいさつの中で「この森が未来の帯広市民の宝物となるように、今しっかりとした森づくりをしなければならない」と二十年の節目を強調。続いて、大分市緑の親善訪問団の加賀稔豊団長（大分市助役）が「百年をかけて森をつくろうという壮大な行事に参加できて感激です。きょうは思いを込めて植樹をします」と祝辞を述べた。森の少年隊の高橋康文君（帯光南小五年）が高らかに植樹宣言し、作業に移った。

植樹会場では二十周年を記念して、高橋市長をはじめ、加賀団長、棚瀬菅一帯広の森植樹祭実行委員長、岡田繁帯広市議会議長らによる記念植樹が行われた。

今年は団体で参加する九十組（約五千人）をはじめ、当日申し込んだ一般の家族が高らかに植樹宣言し、作業に移った。

植樹会場では二十周年を記念して、高橋市長をはじめ、加賀団長、棚瀬菅一帯広の森植樹祭実行委員長、岡田繁帯広市議会議長らによる記念植樹が行われた。

新築・リフォーム
秋田建設
東15南3
☎23-6808

ミズナラをはじめ、九種で七千二百六十本を植樹。参加者は「立派な森に育ちます」とスコップを手に植樹しながら、スコップを手に植樹作業に汗を流した。

十勝毎日新聞
平成6年10月6日

指導員が合同事前視察

帯広の森市民育樹祭 過去最高の人出に備え

帯広の森市民育樹祭が十六日午前十時から帯広の森（帯広市南町南八線）で開かれる。今年は過去最高の人出となることから、同実行委員会（林光繁委員長）は五日午後七時から帯広市役所で会議を開き、当日スムーズに進めるため指導員の合同事前視察を行うことを決めた。今年は四・三㌶を作業する。

今年で四回目を迎える育樹祭は、枝打ち、間伐が必要になってきた帯広の森を、市民の力で管理している。昭和五十四年の第五回市民植樹祭で植樹した四・三㌶を計画している。

育樹祭への市民の関心は年々高まっており、三百に締め切られた育樹祭の団体参加申し込みは過去最高。昨年より百人以上も多い三十団体七百三十六人に上っていた。

育樹会場は広く迷いやすいため、参加者の育樹地へのスムーズな誘導と作業の円滑化が課題。

この日の会議でも当日の混乱を避ける対策が話題になった。

その結果、指導員が育樹会場の場所、木の成長ぶりなどを正確に把握しておく必要があるとして、七日午後、合同事前視察を行うことを決めた。今年度は、帯広営林支局など五団体から指導員が参加する。

ダイヤ
ヒューマンサービス
サンクセンター

十勝毎日新聞
平成6年5月15日

未来へつながる森を

20周年迎えた帯広の森市民植樹祭

「立派な木に育ってね」―。思いを込めて植樹する参加者たち

曇天なんの広がる笑顔

「みんなの手で帯広に森をつくろう」―。第二十回帯広の森市民植樹祭が十五日午前十時から行われた。連日の好天も崩れ、あいにくの空模様になったが、植樹会場（空港南町南一〇線）には、朝早くから多くの市民が訪れた。今年は二十周年を記念する植樹ということもあり、参加者は「未来へつながる森をつくろう」と一生懸命植樹に汗を流していた。

南保育所は親子60人参加

○…今年で植樹祭参加四回目という南保育所ゆりかご会（上河まゆみ会長）は、こいのぼりが集合の目印。旗が立ち並ぶ会場の中でもひと際わ目立っていた。

約六十人の親子が参加。藤森桜ちゃん（四）は「初めてだけど、木を植えるのはおもしろい」とにこにこ。子供たちは赤や黄色のカラフルな長靴を履き、お母さんたちと一緒にスコップを持って楽しんでいた。

植樹のあとはジンギスカンで親ぼく会。上河会長は「雨が降らなければいいけれど…」と空を気にしていた。

大分の15人も植樹に満足げ

○…大分市緑の親善訪問団（加賀稔豊代表、団員四十五人）は、旅先ということもあり、ふだん履きの靴にビニールをかけていざ植樹。団員の一人、河村其実さん（五七）は「きょうは寒いけれど、北海道に来た気がします。帯広は広々としていいですね」と感想。

団員たちは自分の植えた木に、日付と名前が入った木のプレートを掛け、お互い写真を撮り合うなど、植樹に満足そうだった。

森の少年隊は今年で18回目

○…第三回から参加している森の少年隊（大橋正朗隊長）は、今年で十八回目の植樹。紺色のユニホームでスコップを動かした。

少年隊は市内の五、六年生で構成しているため、六年生は最後の植樹。開西小六年三組の林真紀子さんは「ちょっと寂しい。きょう植樹した木が元気に大きくなってほしい」と話していた。班ごとに分かれた八十人の少年隊メンバーは、心を込めて植え付け作業を行った。

西帯広郵便局17人が初参加

○…西帯広郵便局（帯広市西二条南三、池田勝彦局長）は今回初参加。「地域行事にはなるべく参加したかったんです」とこの春赴任した池田局長はうれしそう。植樹は今年から自由な配列でランダム植樹ができるようになったため、十七人の郵便局員は二重の円形に植樹した。前田雅智さん（帯広市西二六南六）は「ぜひ来年も参加します」と初参加ながら楽しみを見つけた様子だった。

大分の45人迎えレセプション

○…「大分市緑の親善訪問団」の歓迎レセプションが十四日午後六時から、帯広グランドホテルで開かれた。同訪問団は帯広の森植樹祭に参加するため、来帯した。

大分市からの一行四十五人と帯広市など合わせて百十人が出席。西條幹夫市長が「今後も大分市から、歴史的にも技術的にも大いに学んでいきたい」と歓迎の言葉を述べ、加賀稔豊大分市助役が「提携を深め、お互いにまちづくりに励んでいきたい」とあいさつした。

岡田肇市議会議長、大分市の安部武士市議会議長、棚瀬義一植樹祭実行委員長があいさつしたあと、林正巳帯広観光協会長の乾杯の音頭で祝宴に入った。最後は大分合同新聞の松井保夫業務局事業部長が万歳で締めくくった。

大分市との親交を深めた歓迎レセプション

十勝毎日新聞
平成６年10月９日

市民の力で森の管理を

森の少年隊指導スタッフとして活躍する 三輪　弥子さん(24)

日曜インタビュー

現在の活動の継続が大事

多くの参加願う

第四回市民育樹祭が十六日、帯広市南町南八線の帯広の森で行われる。森の少年隊（大橋正明隊長）は昨年、植樹祭、育樹祭に参加するなど、帯広の森にかかわった活動が多く、「植える森から育てる森」への変化を見守り続けている。少年隊五期生として入隊以来、十年余り活動に携わる三輪さんは今、改めて「市民の力で管理することが必要」と問いかけている。

◇　◇　◇

―まず、森の少年隊に入ったきっかけですが。

緑への関心が高い少年隊

それは単純で、キャンプなどイベントが面白そうだったから。当時は、特に自然に興味があったという訳ではありません。ただ、少年隊の活動を通して自然の中で遊ぶ楽しさを知ったのは事実です。今になると「あの木は私が植えたのよ」と自慢したい気分を味わっていますし、この活動のおかげで、ほかの人に比べ緑への関心は高いかもしれませんね。

―先生役として苦労することもあると思いますが。

子供に伝えられる喜び

苦労を感じたことはありません。四、五年前、子供の悪ふざけなどが影響してか隊員が少なくなったことがありましたが、今は大丈夫。むしろ、子供たちに外で遊ぶ楽しさ、自分が植えた木の成長を見るうれしさを伝えられる喜びを味わっています。

―今後の少年隊の活動で何か考えていることがありますか。

木の成長は時間がかかる

基本的には植樹祭、育樹祭への参加やドングリ拾いなど、現在の活動を長く続けることーそれが大事だと考えています。木の成長には時間がかかるわけで、地道に続けていかねばなりません。子供たちにとって面白いことばかりではないと思いますが、将来、良かったと感じられる活動を生み出してあげれば最高ですね。「自分たちが拾ったドングリが森になる」という今ある感激をさらに、という思いをしています。

―その一つの活動ステージである帯広の森の将来についてどう考えていますか。

人が手を入れないとダメ

今、必要なことは世話をしてあげること。今年六月、昨年育樹した所を観察したのですが、野草が顔を出していました。間伐や枝打ちをした結果だと思います。やはり人が手を入れてあげないとダメなんだと感じました。市民の手で植えた森を市民の力で管理してあげる―これが大切です。そのためにも育樹祭には一人でも多くの人に参加してほしいですね。

（西井　堅二）

取材を終えて

帯広の森の造成が始まって二十年。これまでに延べ九万九千七十七人が植樹に参加した。そして今、健康な森を育てるために、間伐や枝打ちが必要な時期を迎えている。

植樹に比べ、育樹作業は地味で手間もかかる。「ボランティアという感覚はまったくありません」と話す三輪さん。その裏情はさわやかで、気負いはない。それは、森づくりの楽しさを知っているからなのだろうか。三輪さんの話を聞いていて、少年隊が森への理解者を育てる役割を果たしていることを実感した。一層の活躍を期待したい。

情報の日曜
上田クリーニング
市内西3条4丁目☎25539

〈プロフィル〉昭和四十五年、帯広市生まれ。広陽小学校五、六年生の時、森の少年隊に参加し、卒業後もリーダーとして活躍。三年に帯広大谷短大を卒業後、つばさ保育所に勤務。保母として働く現在も休日を利用して後輩の指導に当たっている。帯広市内で、父の公司さん(五〇)と母の弘子さん(四七)、二人の妹と五人暮らし。

健康な帯広のまちづくりと汗

第4回市民育樹祭

過去最高770人参加

力合わせ除伐や枝打ち

十勝毎日新聞
平成6年10月16日

ノコギリを手に枝払いに奮闘する森の里小の児童

市民の手で森を管理していく第四回帯広の森市民育樹祭（林光繁実行委員長）が、十六日午前十時から南町南八線の帯広の森で開かれた。あいにくの小雨ながら、過去最高の七百七十人が参加。除伐、枝打ち作業に汗を流し、森はすっきりと生まれ変わった。

（13面に関連記事）

帯広の森は今年、造成二十周年を迎えた。これまでに延べ九万九千七十七人の市民が参加し、十七万二千七百十三本の木々が植えられている。育樹祭は手入れが必要になった森を「市民の力で管理していこう」と三年にスタート。今回は、昭和五十四に植樹した四・三ヘクタールが対象になった。

作業に先立って行われた開会式では、林実行委員長が「環境の悪化が話題になっています。市民も意識を変革して、すばらしい財産・帯広の森を管理していきましょう」とあいさつ。続いて帯広営林支局指導普及室の高橋勝美室長による育樹指導のあと、森の少年隊の新井天礼少さん（森の里小五年）が「先輩たちが植樹した森を、健やかに育てていきます」と高らかに宣言した。

育樹会場に移動した参加者は、早速作業を開始。エゾヤマザクラ、ハルニレ、チョウセンゴヨウマツなどが七、八㍍に成長した森の中で、傾れないノコギリを使って余分な枝をはらい、落とした木々を集めていった。作業を終えた森は、林の下部が見渡せる親しみやすい森になった。

帯広の森は今

小動物調査から

上 小動物

ウサギとキツネ逆転

森孤立、内部の自然分断

「エゾリスの会」は、エゾリスをはじめとする小動物と人間が共に暮らしてゆける街づくりを目標に活動

▲キタキツネの親子。帯広の森で年々増えている（辻川和夫さん撮影）

十勝毎日新聞
平成6年11月27日

してきましたが、一九八九年から帯広市の委託で、五年間にわたって帯広の森の小動物の調査を行いました。昨年度、この調査結果と提言を報告書にまとめました。その内容を三回にわたって紹介します。

■7種類を確認■

帯広の森では七種類のほ乳類が確認されています＝表。今回はエゾリス以外のほ乳類について説明します。

オオアシトガリネズミが八八年に二匹捕獲されていますが、前年に調査地から一・五㌔ほど離れた自然林、通称「若葉の森」で六～八月に行われた調査で百二十七匹も捕獲されたことと比較すると、調査日数などの違いはあるにしても、この結果はかなり少ない＝自然度が低いといえるでしょう。

つぎに、エゾユキウサギとキタキツネの関係です。これらは冬に足跡を追跡して調査しました。表中、数字のあとの＋マークは足跡が多すぎて何個体か判別不能だったことを示しています。年ごとにウサギとキツネの足跡の数が逆転し、ついにキツネだけになったことがわかりました。ここ数年でウサギとキツネのバランスが完全に崩れてしまったわけです。

■すみにくい森■

キツネは街の生ごみも、森の小動物も食べ、巣は森の中に穴を掘ればいいのでとてもすみやすそうです。

周辺の開発と森の孤立、自然の復元の遅れと森内部の自然の分断が、ウサギを追い込んでしまった原因と考えられます。でもウサギは森の地面にすむしかありません。この森は草の茂みが少ないので身を隠しにくく、ほかの森からも新たなウサギが来られないような、多様性やつながりの少ない、すみにくい森だったのではないでしょうか。

（帯広百年記念館・池田孝嘉学芸員）

帯広の森内で観察されたほ乳類・その1

	エゾリス	エゾユキウサギ	キタキツネ
86.12.18	0	3	1
89.12.17	0	1	2
90.12.28	0	1	2
91.6.29	－	－	1
91.9.25	1死体	－	－
91.9.26	1	－	－
92.1.3	－	0	2＋
92.3.9	－	－	1
94.1.2	4	0	1＋

帯広の森内で観察されたほ乳類・その2

	ミンク	オオアシトガリネズミ	エゾヤチネズミ	カラフトアカネズミ
88.6	－	2	4	1
91.6.16	1	－	－	－

十勝毎日新聞
平成6年11月28日

帯広の森は今

小動物調査から

中 野鳥

43回調査で61種観察

水鳥の数と種類が増加

■一回だけが18種類■ 計四十三回に上る調査で観察した野鳥は六十一種類とした。これは緑ケ丘公園との記録七十六種類と比べて十五種類少ないものです。

観察された鳥類

種名	回	種名	回
アカエリカイツブリ	1	キンクロハジロ	4
ハジロカイツブリ	1	イカルチドリ	4
アオサギ	1	コアカゲラ	4
カルガモ	1	ツグミ	4
コガモ	1	ヨシキリ	4
ハイタカ	1	コマヒワ	5
ツツドリ	1	カッコウ	5
セグロセキレイ	1	カアカゲラ	6
アカモズ	1	ノゴマ	6
コルリ	1	エナガ	6
ウグイス	1	スズメ	6
メボソムシクイ	1	トビ	7
エゾムシクイ	1	アカハラ	7
センダイムシクイ	1	ヒガラ	7
ゴジュウカラ	1	ベニマシコ	7
ホオアカ	1	カワラヒワ	9
イカル	1	ハシボソガラス	10
ハシブトガラス	1	ヒヨドリ	10
アリスイ	2	モズ	11
キビタキ	2	ヒバリ	11
キウソ	2	ノビタキ	11
ニュウナイスズメ	2	ハシブトガラ	11
イソシギ	3	ムクドリ	12
エゾセンニュウ	3	マガモ	12
キクイタダキ	3	ビンズイ	13
ホオジロ	3	ハクセキレイ	15
シマアオジ	3	オオジシギ	16
イスカ	3	キジバト	18
カケス	3	シジュウカラ	22
ホシガラス	3	アオジ	

次に野鳥を回数の少ない順に並べました＝表。

一回しか出現していない鳥類が十八種類います。この中には森の豊かさの象徴であるハイタカ、ツツドリや、替通にくるはずのゴジュウカラが含まれます。

草原の野鳥が明と見られます。このうちノゴマ、ムシクイ類、センニュウ類などは少なく、やや明るい森でも良いシジュウカラ類やシメ、ビンズイなどは上位にいます。

■少ない キツツキ類■ キツツキ類が少なく、特にアカゲラは北海道の代表的な野鳥ですが冬三回、繁殖期三回しか観察できていません。キツツキの食べ物は主に朽ちた木の中にすむ昆虫です。虫のすむ木の少なさは森の未熟さを物語っています。残っている自然林だけでは、虫の場所やえさが足りないのでしょうか。

■調整池付近を整備■ 水鳥の種類と数は増加しています。調整池付近は、自然石や植物などを植え、生き物に配慮した整備がされてきました。昔はマガモしかいなかったものが、近年では五種類も増えています。

野鳥から見た帯広の森の環境が整えば野鳥はこたえてくれます。自然として豊の高い帯広の森を育てるため、さまざまな調査と自然環境復元の技術の本格的な研究と実験が必要な時期に来ている、と野鳥の暮らしぶりから感じました。

（帯広百年記念館・池田亨嘉学芸員）

洗濯の仕上
上田クリーニング
帯広市西3条南4丁目37 ☎23-2339

北海道の代表的な野鳥、アカゲラ（高倉功さん撮影）

十勝毎日新聞
平成6年11月29日

帯広の森は今

小動物調査から

下 エゾリス

リスに物足りない森

自然観育てる活動を

木の間から愛らしい顔をのぞかせるエゾリス。人間の世界を見つめているようだ（中村成広さん撮影）

エゾリスが巣やねぐらをかけた木

植樹	0
カラマツ	42
トドマツ	8
不明	2
苗ほの針葉樹	1
合計	53

■個体数は4―11匹■ 最終回はエゾリスの調査結果と森への提言です。

リスの個体数は観察した匹数や巣の数から、最低でも四匹、多くても十一匹と予想しています。リスの個体数と環境との自然な関係は、まだはっきりしていません。エゾリスが多いといわれる帯広農業高校の環境は、山、森、街の緑へと生きものが安全に移動できる環境をつくる必要があります。そのためには、自然環境復元のための研究・実験、森の区画りの見直し、市全体の自然のつながりの検討、そしてそのための人材の配置が必要になるでしょう。

でも、もっと必要なのはみなさんの自然への認識かもしれません。ただ植樹が成長しても森にはなりません。そんな貧しい自然観を豊かにしていく活動が豊かな森を作ります。森の未熟は人の自然観が未熟な何よりの証拠です。帯広の森に一番欠けているのはそんな活動かもしれません。

（帯広百年記念館・池田亨嘉学芸員、おわり）

■しかたなく営巣■ リスの巣（巣とねぐら）の場所を調べました＝表。その結果、合計五十三個あり、そのそばに質の高い自然環境がある場所がリスの密度が高いようです。

リスの数は増えることが予想されますが、現在のところまだ、森はリスには物足りない場所と見えているようです。

■力ある環境を後に■ これらの結果から、私たちは自然として十分な力のある環境を復元または拡大し、それを帯広の森の核とするべきだと考えます。次に、山、森、街の緑へと生きものが安全に移動できる環境を

植樹に作ったものはゼロで防風林などのカラマツ体数と環境との自然な関係には四十二個も見られました。カラマツは冬に落葉し、夏でもほかの針葉樹に比べて巣が見えやすいので、本来リスはあまり巣をかけません。これはまだ森の植樹が育っていないため、しかたなく質の高いカラマツに営巣しているものと思われます。植樹の成長につれてリスの数は増えることが予想されますが、現在のところまだ、森はリスには物足りない場所と見えているようです。